

かわ た な じ ょ う り あ と
川 棚 条 里 跡
さふね たじり
(木舟地区・田尻地区)

2001

財団法人 山口県教育財団

山口県埋蔵文化財センター

序

山口県では、恵まれた自然環境を保全しつつ、豊かな地域環境の創造に向け、農業基盤整備事業等の諸施策が推進されています。

地域によっては、こうした開発事業に伴い、地下に埋もれている歴史的遺産である遺跡等の消失が危惧されることから、当県では、関係機関との調整を図りながら、必要な範囲について事前に発掘調査を行い、その結果を記録として留め、郷土を築いてきた先人の足跡を後世に残すこととしております。

本書は、豊浦郡豊浦町川棚地区の県営ほ場整備事業に先立ち、同地区内に所在する川棚条里跡（木舟地区・田尻地区）について、財団法人山口県教育財団が山口県教育委員会及び山口県農林部からの委託を受けて実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、弥生時代～古墳時代に営まれた集落跡を検出するとともに、縄文時代から中世にいたる数多くの遺物が出土し、当時の人々の生活文化の実態を知る上で、貴重な資料を得ることができました。

本書が、文化財保護に関する理解を深め、教育並びに学術研究としての資料、また、郷土史実の基礎資料等として、広く活用されることを願うものです。

終わりに、当発掘調査の実施並びに報告書の作成に当たり、御指導・御協力いただきました関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成13年3月

財団法人山口県教育財団
理事長 牛見 正彦

例 言

- 1 本書は、山口県豊浦郡豊浦町大字川棚に所在する川棚条里跡（木舟地区・田尻地区）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、県営は場整備事業に伴い、財団法人山口県教育財団が山口県の委託を受け実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体	財団法人山口県教育財団	山口県埋蔵文化財センター
調査担当	主 査	西 岡 義 貴
	指導主事	鈴 木 卓
	指導主事	向 上 昭 彦
- 4 調査に当たっては、山口県教育委員会、山口県農林部農村整備課、豊田農林事務所、豊浦町農林水産課、豊浦町教育委員会並びに地元関係各位の協力、援助を得た。
- 5 石製品については、山口県立博物館専門学芸員 亀谷 敦 氏に表面観察による石材鑑定を依頼した。
- 6 図1は、国土地理院発行2万5千分の1地形図「川棚温泉」を複製使用した。
- 7 挿図の方位は国土座標（第3座標系）の北、標高は海拔標高で示した。
- 8 木舟地区、田尻地区という地区名は、小字名による。
- 9 土色の表記はMunsell方式による。

（農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』）
- 10 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
- 11 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

SB	: 竪穴住居	SH	: 掘立柱建物	ST	: 墓	SK	: 土坑	SD	: 溝	SP	: 柱穴
TR	: トレンチ										
- 12 本書の作成及び執筆は、西岡、鈴木、向上が分担して行い、編集は鈴木が行った。

本文目次

I 遺跡の位置と環境	2
II 発掘調査について	3
III 遺構について	15
IV 遺物について	31
V まとめ	46



手埴形土器
(田尻④地区)

図 版 目 次

図版 1	調査区遠景(東から) 住居群(田尻③南地区)
図版 2	SB01北西から SB02北西から SB03北西から SB04北西から
図版 3	SB01遺物出土状況 SB02遺物出土状況 SB04遺物出土状況
図版 4	SD48遺物出土状況 SP02遺物出土状況 SP01遺物出土状況 SP06遺物出土状況 SP09遺物出土状況
図版 5	SK11・12・13・14北西から SK17集石出土状況 SK22南西から SK32遺物出土状況
図版 6	ST02南東から ST02遺物出土状況 ST01北東から 木舟④東地区遺物出土状況
図版 7	遺物出土状況
図版 8	田尻④地区遺物出土状況(1)
図版 9	田尻④地区遺物出土状況(2)
図版10	出土遺物(堅穴住居)
図版11	出土遺物(土坑)
図版12	出土遺物(溝・墓・柱穴・各地区包含層)
図版13	出土遺物(木舟④東地区)
図版14	出土遺物(田尻①B地区)
図版15	出土遺物(田尻①B・②地区)
図版16	手焙形土器(田尻④地区)
図版17	出土遺物(田尻④地区)
図版18	出土遺物(田尻④地区)
図版19	出土遺物(田尻④地区・石器)

挿 図 目 次

図 1	川棚条里跡と周辺の遺跡…………… 1
図 2	調査区の位置…………… 5
図 3	遺構分布図(1)…………… 6
図 4	遺構分布図(2)…………… 7
図 5	遺構分布図(3)…………… 8・9
図 6	遺構分布図(4)…………… 10・11
図 7	遺構分布図(5)…………… 12・13
図 8	遺構分布図(6)…………… 14
図 9	SB01・SD01実測図…………… 18
図10	SB02実測図…………… 19
図11	SB03実測図…………… 20
図12	SB04実測図…………… 21
図13	遺物出土状況実測図…………… 22・23
図14	土坑実測図…………… 24
図15	SK22実測図…………… 25
図16	SK32実測図…………… 26
図17	トレンチ土層断面実測図(1)…………… 27
図18	トレンチ土層断面実測図(2)…………… 28
図19	トレンチ土層断面実測図(3)…………… 29
図20	トレンチ土層断面実測図(4)…………… 30
図21	出土遺物実測図(1)…………… 33
図22	出土遺物実測図(2)…………… 34
図23	出土遺物実測図(3)…………… 35
図24	出土遺物実測図(4)…………… 36
図25	出土遺物実測図(5)…………… 37
図26	出土遺物実測図(6)…………… 38
図27	出土遺物実測図(7)…………… 39
図28	出土遺物実測図(8)…………… 40
図29	出土遺物実測図(9)…………… 41
図30	出土遺物実測図(10)…………… 42
図31	出土遺物実測図(11)…………… 43
図32	出土遺物実測図(12)…………… 44
図33	出土遺物実測図(13)…………… 45

表 目 次

表 1	土坑一覧表…………… 17
-----	---------------

調査区通景 (東から)



住居群 (田尻③南地区)



図版 2



S B02 北西から



S B04 北西から



S B01 北西から



S B03 北西から



SB02 遺物出土状況



SB04 遺物出土状況

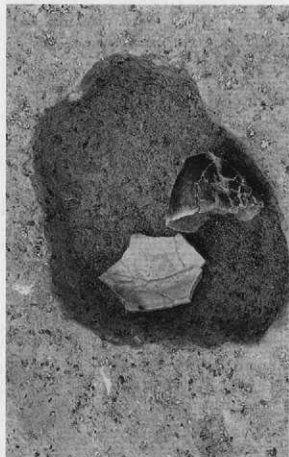


SB01 遺物出土状況

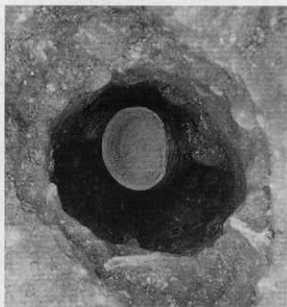


SB04 遺物出土状況

図版 4



S P 02 遺物出土状況



S P 09 遺物出土状況



S D 48 遺物出土状況



S P 06 遺物出土状況



S P 01 遺物出土状況



S K 17 集石出土状況



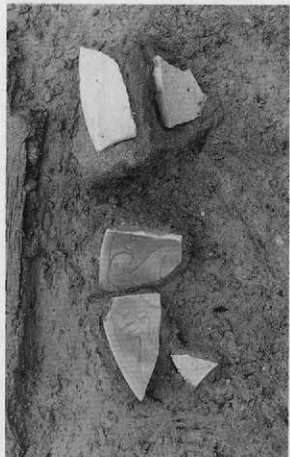
S K 32 遺物出土状況



S K 11・12・13・14 北西から



S K 22 南西から



ST02 遺物出土状況



木舟④集地区遺物出土状況



ST02 南東から



ST01 北東から



田尻①B地区



田尻②地区

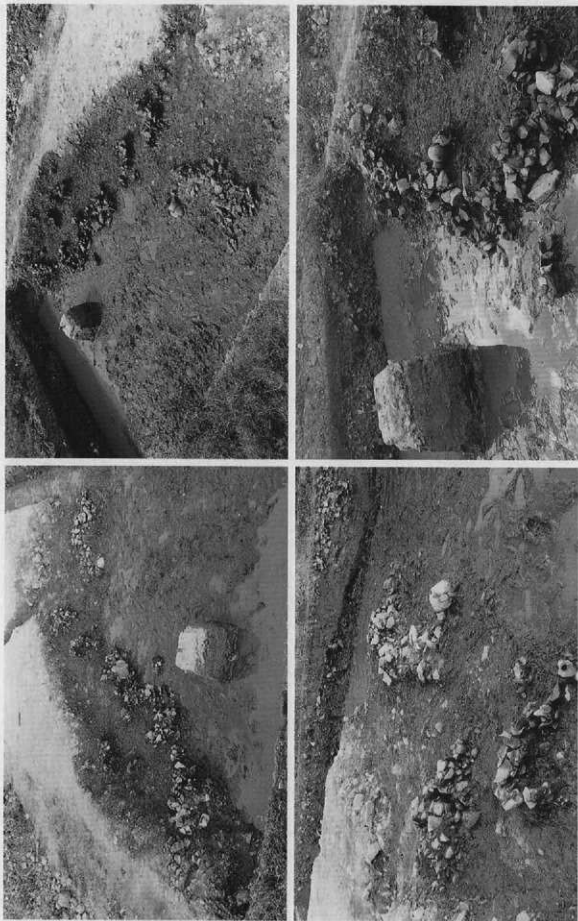
遺物出土状況



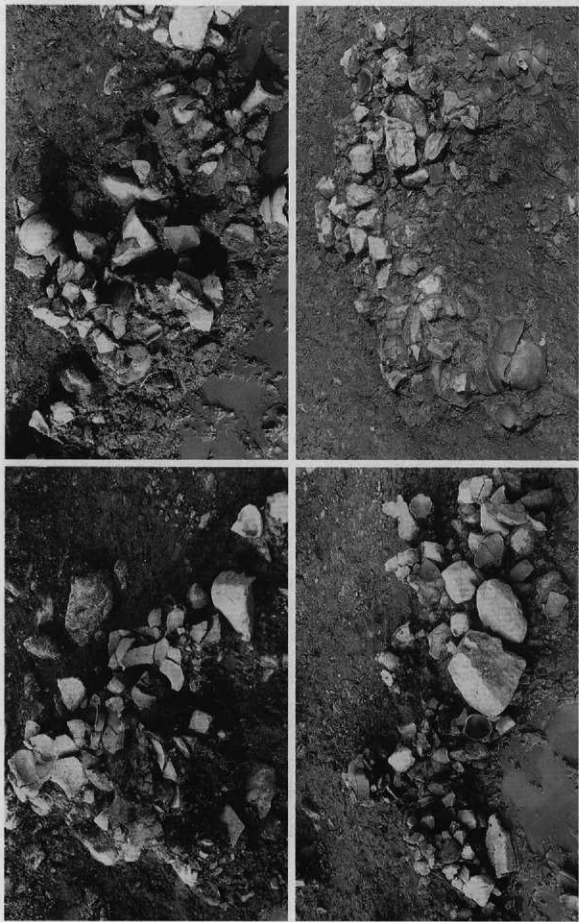
田尻①B地区



田尻①B地区

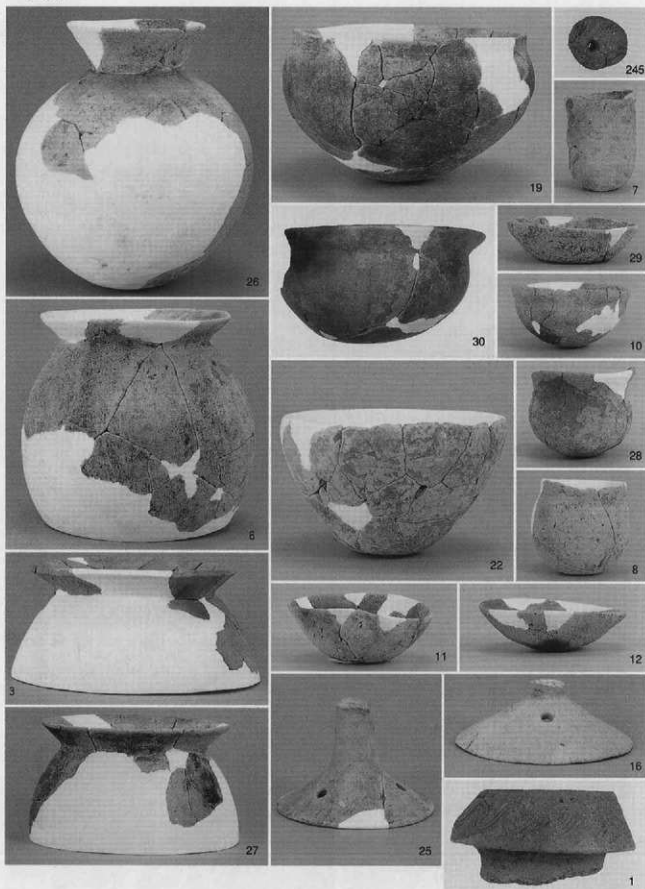


田原④地区 遺物出土状況(1)

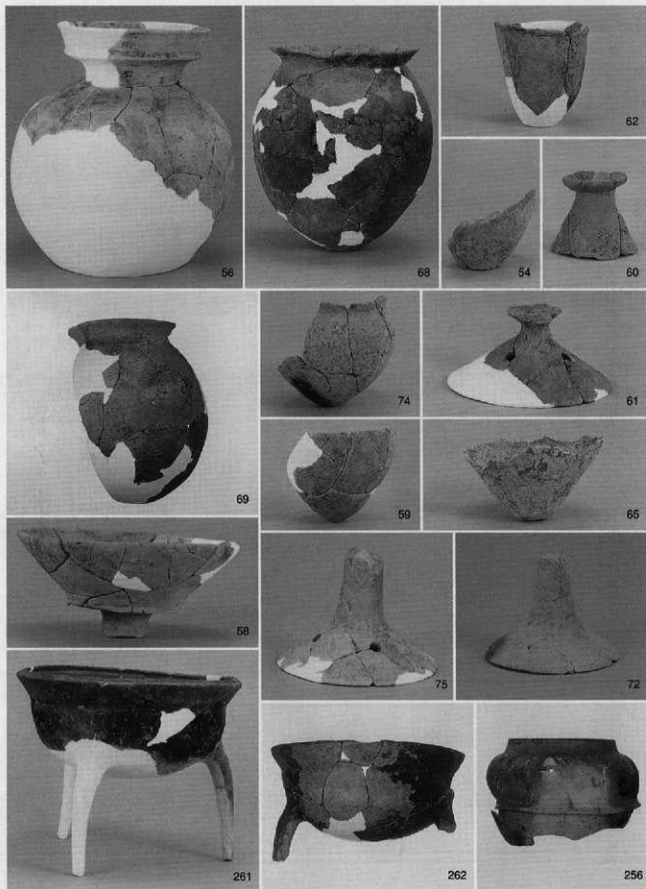


田尻④地区 遺物出土状況(2)

図版10

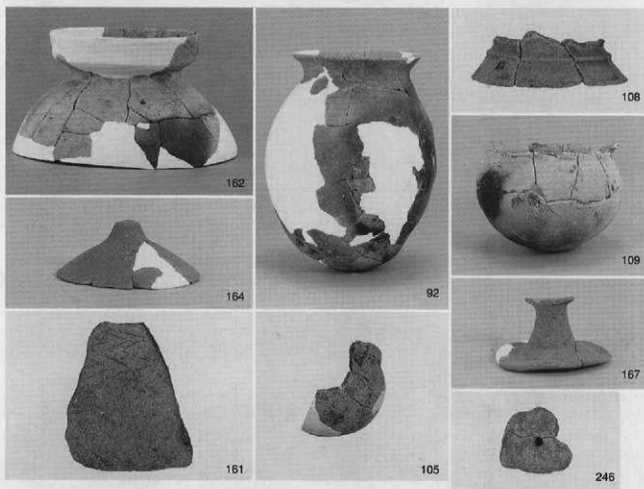


出土遺物
(竪穴住居)

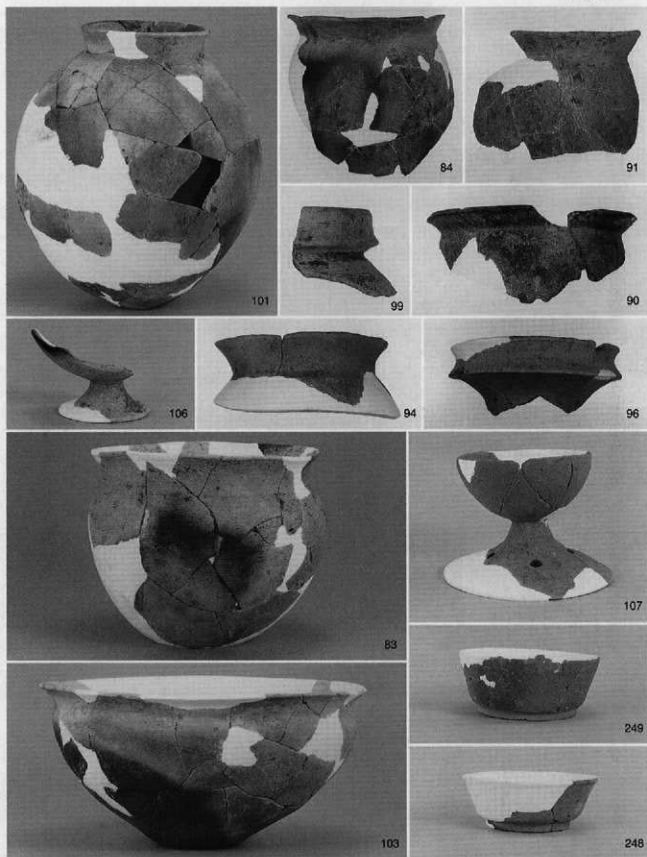


出土遺物
(土坑)

图版12

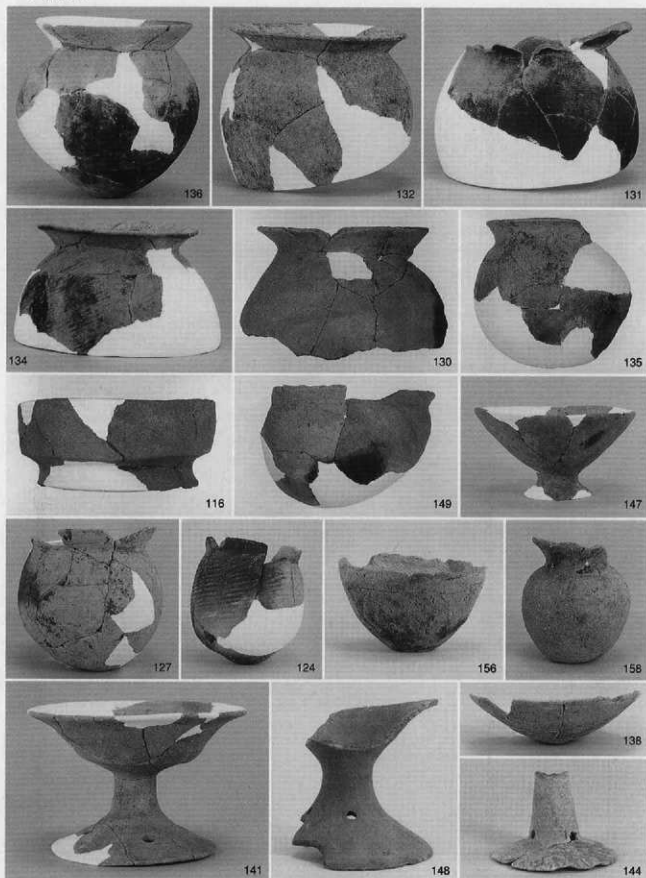


出土遺物
 (清・墓・柱穴)
 (各地区包含層)



出土遺物
(木舟④東地区)

图版14



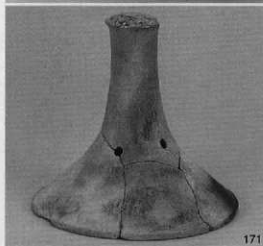
出土遺物
(田房①B地区)



174



173



171



172



169



170



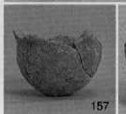
155



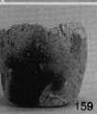
160



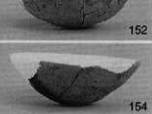
150



157



159

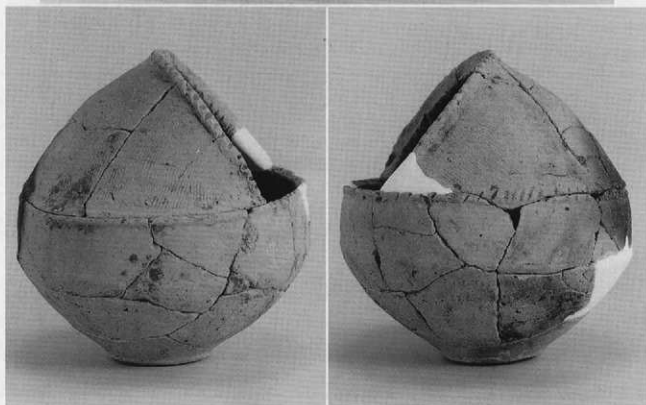


152

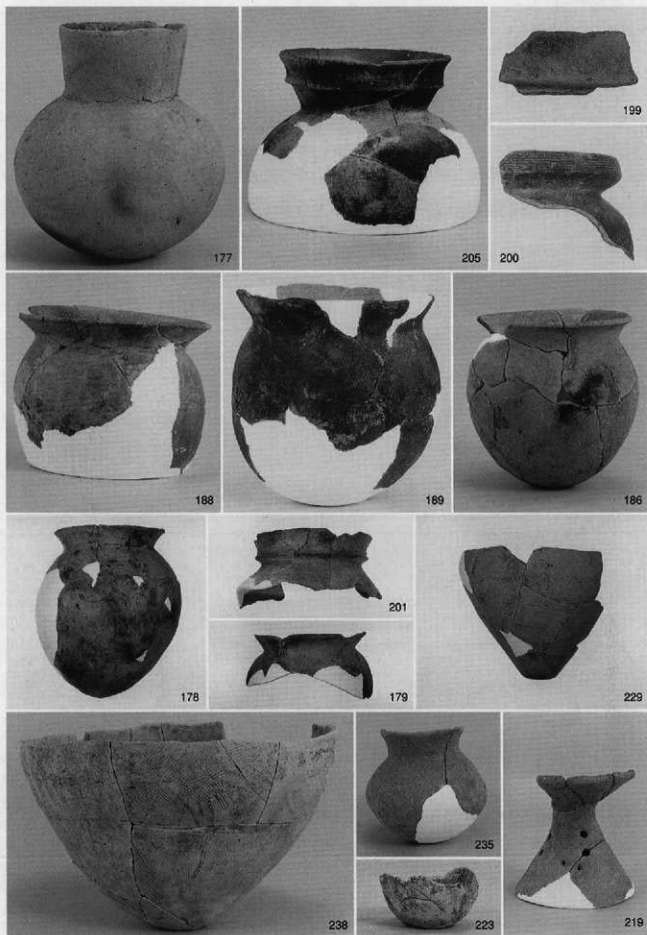


154

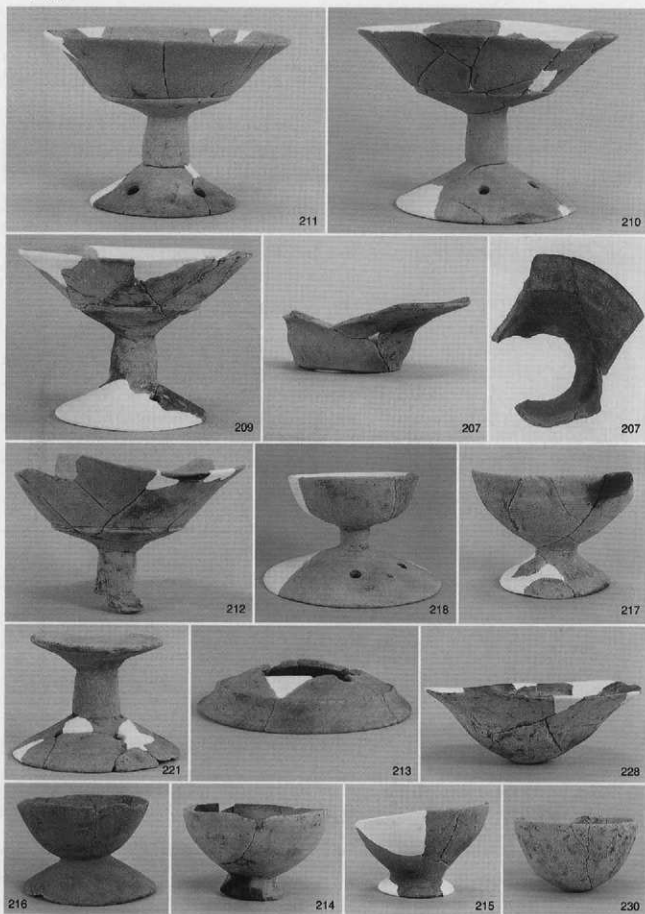
出土遺物
(田尻①B・②地区)



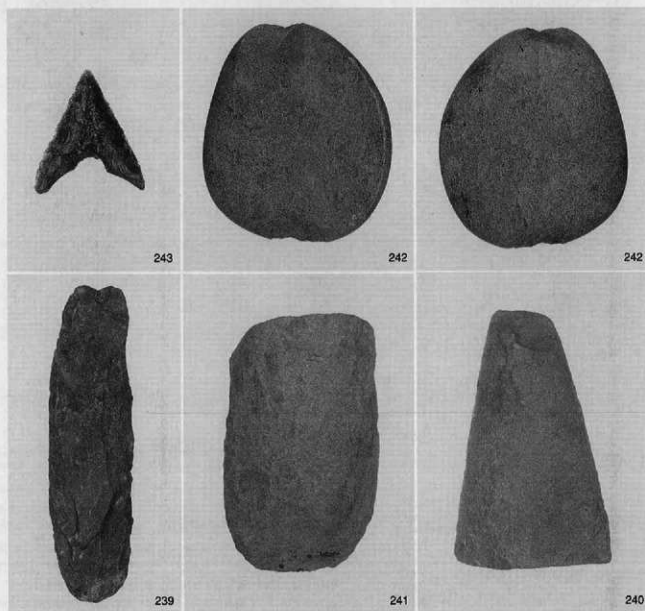
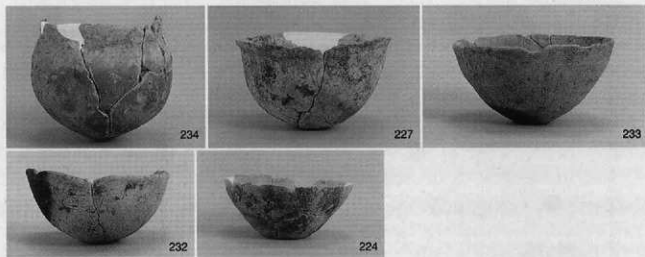
手埴形土器
(田尻④地区)



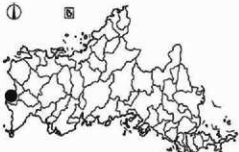
出土遺物
(田尻④地区)



出土遺物
(田尻④地区)



出土遺物
(田尻④地区・石製品)



- 川棚条里跡 (木舟地区・田尻地区)
- 川棚条里跡 (菟池地区・出合地区・藤本地区)
- 江良遺跡
- 大塚古墳
- 心光寺古墳群
- 下岡遺跡
- 吉永遺跡
- 城山遺跡
- 中ノ浜遺跡
- 田島ヶ丘遺跡
- 高野遺跡
- 大門古墳
- 川棚条里跡 (大浦・台地区)
- 向日山遺跡
- 青井古墳群
- 無田遺跡
- 宝蔵寺遺跡
- 船頭遺跡
- 向日山古墳群
- 大迫古墳群
- 林崎遺跡
- 白鷺古墳群
- 大門遺跡

図1 川棚条里跡と周辺の遺跡



I 遺跡の位置と環境

川棚条里跡は、山口県の西端中央部に位置する豊浦郡豊浦町大字川棚に所在する。本年度調査を行った木舟地区・田尻地区は、川棚川の支流江良川の右岸に広がり、西に響灘を臨む豊浦低地の奥に位置する、弥生時代後期後半～古墳時代初頭を中心とした集落遺跡である。

豊浦低地は、平野部に乏しい響灘沿岸地域の中では比較的まとまった平野で、高野地区の洪積台地や吉永地区の低丘陵、川棚川や吉永川、黒井川などの河川が形成した沖積平野などで構成される。河口付近には、冬の強い季節風の影響によって非常に広い砂丘が発達している。平野部の北は豊浦山地が海岸付近まで迫り、東は急峻な山々が峰を連ねているが、南の山地は起伏が小さいうえ、断層による低鞍部が形成されているため、陸路は南に向けて開かれている。

豊浦低地では弥生時代になると遺跡数が急増する。大規模な集団墓地である中ノ浜遺跡、木製農具などが出土した無田遺跡のほか、田島ヶ丘遺跡、高野遺跡、下岡遺跡、吉永遺跡、大門遺跡といった集落跡などが低地の各地に分布し、まさに遺跡の密集地帯となる。

高野遺跡、吉永遺跡は、豊浦低地のほぼ中央に位置する吉永丘陵の北東と南西に相対して立地する。ともに、堅穴住居・掘立柱建物を合わせ100軒以上が発見された拠点の集落であり、共通点も多い。その1つ目は、弥生時代前期末に人々の生活が始まったもの中期に空白を生じ、終末期～古墳時代初頭に生活が再開されたことである。弥生時代中期は城山遺跡に代表される高地性集落が成立した時期であり、社会的緊張が高まっていたと考えられる。この間の居住区の変遷は興味深いのが現時点では明らかになっていない。2つ目は屋外周溝を伴う堅穴住居が確認されたことである。県内では豊浦山地の東にある菊川町下七見遺跡の例が報告されており、いずれも弥生時代終末期～古墳時代初頭に比定される。特別な用途や優位性は考えにくく、この時期に一部地域で盛行した住居様式であろう。なお、特徴的な遺物として5世紀後半～6世紀後半の甕形土器が高野遺跡と船頭遺跡で出土している。出土例の少ない遺物だが高野遺跡では多数出土している。また吉永遺跡では舟形土製品が出土した。準構造船の形態を有するこの土製品は、当時の人々の航海技術を示すとともに、現在はやや海から離れた位置にある吉永遺跡が海と深い関わりを持っていたことを物語っている。

弥生時代終末期～古墳時代の資料は川棚条里跡でも得られている。昨年度調査した大浦・台地区で検出した旧河川では、弥生時代終末～古墳時代の土器が良好な状態で大量に出土した。同じく出合地区では、集落が5世紀前半に営まれた後一時廃絶し、6世紀後半に再び集落が形成されていたことがわかっている。

大門古墳は古墳時代後期の前方後円墳である。隣接する遺跡の中で、古墳の築造時期と考えられる6世紀前半の住居跡は吉永遺跡で堅穴住居1軒が見つかっているが、この時期の集落の中心は別の位置にあると考えられている。このほか、青井古墳群・大迫古墳群など室津湾周辺、あるいは大塚古墳・白蓮古墳群など平野周辺の低丘陵や台地上に古墳が築造された。

以上、本遺跡に関わる歴史について概観してきたが、中ノ浜遺跡で発見された朝鮮半島由来の支石墓、新羅系陶質土器が副葬されていた心光寺古墳、元寇に備えたと伝えられる石塁跡など、豊浦低地の歴史は大陸や北部九州の影響を抜きにして考えることはできない。

(向上)

Ⅱ 発掘調査について

1 調査に至る経緯

響灘に注ぐ川棚川の下流域に広がる低地には、現存する地割りにみられる表層条里から、以前から条里遺構の存在が指摘されてきたが、これを含む地域が県営ほ場整備事業の対象地となった。そこで山口県教育委員会が平成10年度に事前の試掘調査をしたところ、条里遺構の可能性の高い溝をはじめ、多くの遺構の存在を確認した。この結果を踏まえて、山口県教育委員会と山口県農林部農村整備課が協議を行い、事業の計画に合わせて、平成11年度から発掘調査を実施することとなった。そして、山口県農林部及び文化庁の国庫補助を受けた山口県教育委員会から調査を委託された財団法人山口県教育財団の山口県埋蔵文化財センターと、豊浦町教育委員会が分担して調査することとなった。

平成11年度は、山口県埋蔵文化財センターが菟池地区・出合地区・藤本地区の調査を、豊浦町教育委員会は大浦・台地区の調査を担当した。調査の結果、出合地区と大浦・台地区で条里の坪境とみられる溝を発見した。この溝の位置と方向から、現在の地割りが古代の条里を踏襲している可能性が高いことがわかった。このうち出合地区の溝は、8世紀後半～9世紀前半に設置され、その後中世に至るまで何度も掘り直して利用されている。この掘り直された部分から出土する遺物は11世紀～12世紀のものが中心で、9世紀後半～10世紀の遺物が極めて少ない。この特徴は、水害などによって農地としては放棄された期間があったことを窺わせている。このほか出合地区では、5世紀前半と6世紀後半の集落跡、縄文時代晩期の土坑群を、藤本地区では弥生時代後期以降の井塚跡を発見した。また、大浦・台地区では古代の鍛冶関連遺構と中世の墳墓、中世以前の旧河川などを発見した。旧河川からは弥生時代から中世にかけての大量の遺物が良好な状態で出土した。なかでも緑軸陶器が多く出土したことが注目されている。

今年度の調査では、山口県埋蔵文化財センターは田尻地区・木舟地区を担当した。ここは、川棚川から離れた、表層条里から推定される条里の施行範囲の縁辺部に当たる地区である。今回の調査の対象となった面積は5,065㎡である。

2 現地調査の経過

駐車場設置や調査対象地内の作物の扱いをはじめ、些細なことと思われることについても、地元自治会長や地権者、ほ場整備施行業者など地元関係者と直接お会いして協議、連絡等を密にとることによって調査に対して御理解いただけるよう留



重機による表土除去



空中写真の撮影

意しつつ、4月24日に現地調査を開始した。今回はこれに先立つ4月20日、旧地形を記録する目的で空中写真を撮影した。

まず、山口県教育委員会の試掘調査の成果に加え、遺構の分布や土層の状況をさらに詳細に把握するため、人力による試掘調査を調査地区全域にわたって行った。これらの結果を踏まえて重機によって表土を除去し、人力によって遺構を検出した。広範囲に展開している調査地区の各所に遺構が分布していたので、作業が散開しないように遺構の掘り込みを進めた。周辺の水田の影響で、各地区に湧水があったが、とくに木舟③地区、木舟④地区ではひどく、晴れた日でも調査区が小川のような状態になっていたため、しっかりした排水路を作り、第2遺構面の掘り込みを刈り入れ時期の後にするように作業を進めた。また、トレンチ土層断面などは迅速に記録し、湧水の影響を出来る限り少なくするように努めた。

8月11日、竪穴住居などの集落跡等、第1遺構面の調査で検出した遺構の掘り込みを完了した時点で、空中写真を撮影した。

翌週から重機によって、木舟③地区、木舟④地区をさらに掘り下げて第2遺構面を検出し、人力によって遺物包含層、遺構を掘り込んだ。また、田尻③南地区の第1遺構面下の遺構の有無を確認するため、重機によってTR09を掘り下げた。このほか、人力によって各地区の遺物包含層を掘り込んだ。遺物包含層の調査については、トレンチによって層序を観察し、遺構面を確認した場合は平面的に検出して、これを掘り込んだ。また、田尻①B地区、田尻②地区、田尻④地区の、多数の土器が投げ込まれていた落ち込みについては、調査地区内の遺物包含層をすべて人力で除去して調査した。絶え間ない湧水と粘り気の強い土に悩まされながらの夥しい数の土器の検出は困難を極めたが、丁寧な作業の結果、ほぼ完全な形に復元できた手焙形土器をはじめ、多くの土器を良好な状態で取り上げることができた。

9月28日以降は、調査の完了した地区から順次、施工業者に明け渡ししながら調査を進め、10月19日に現地調査をすべて終了した。(鈴木)



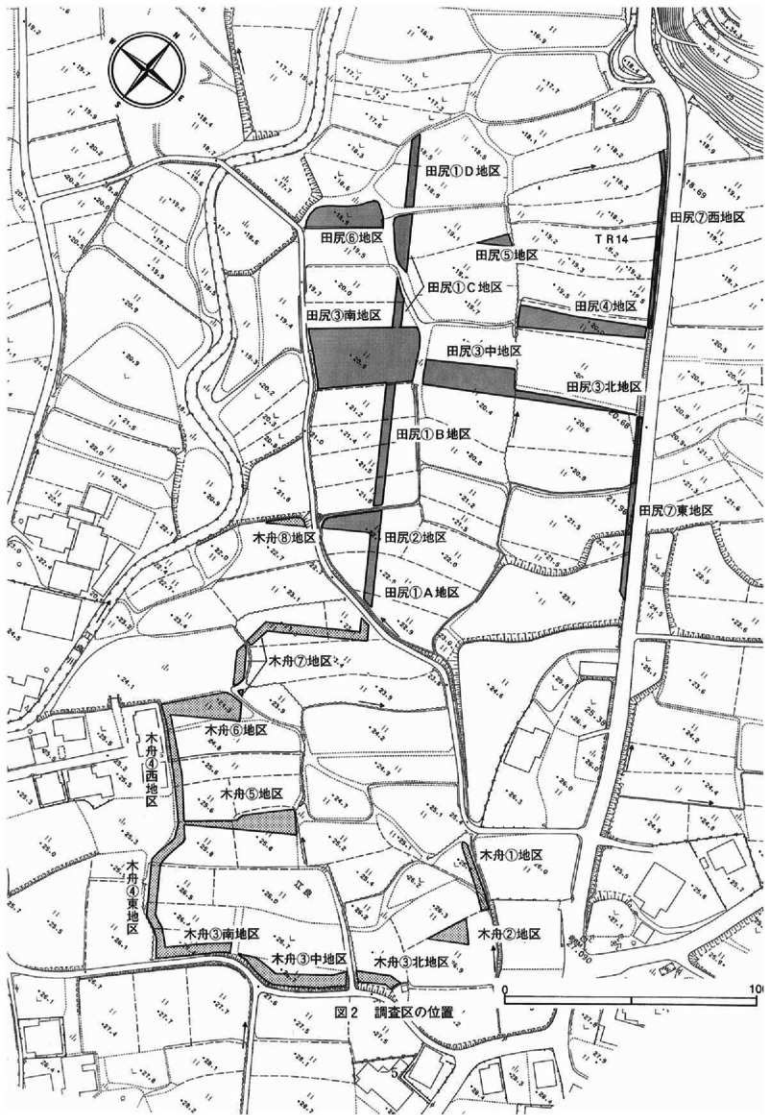
遺構を捜す



遺物を掘り出す



遺構を測る



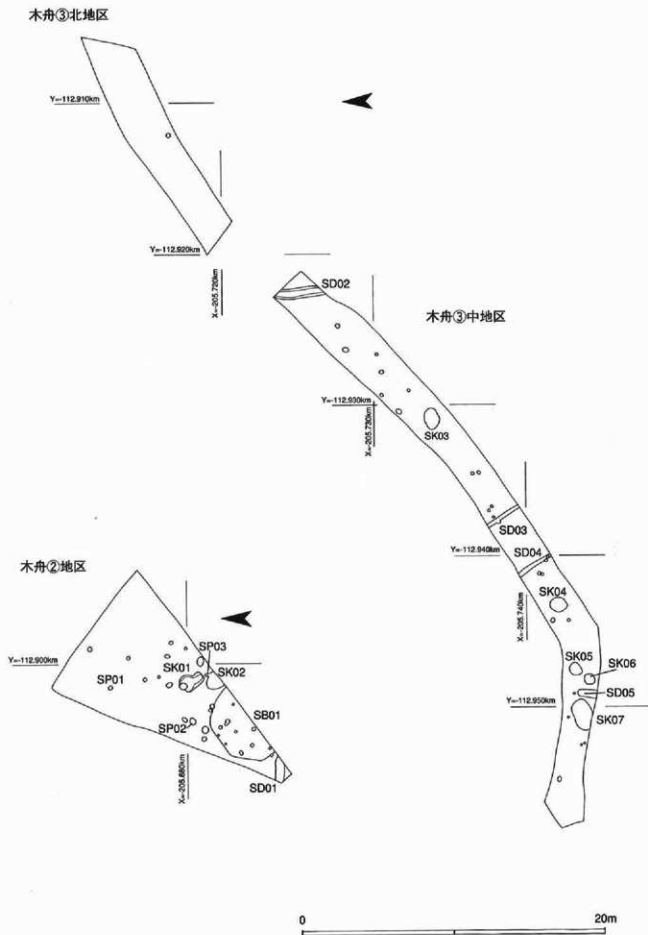


図3 遺構分布図(1)

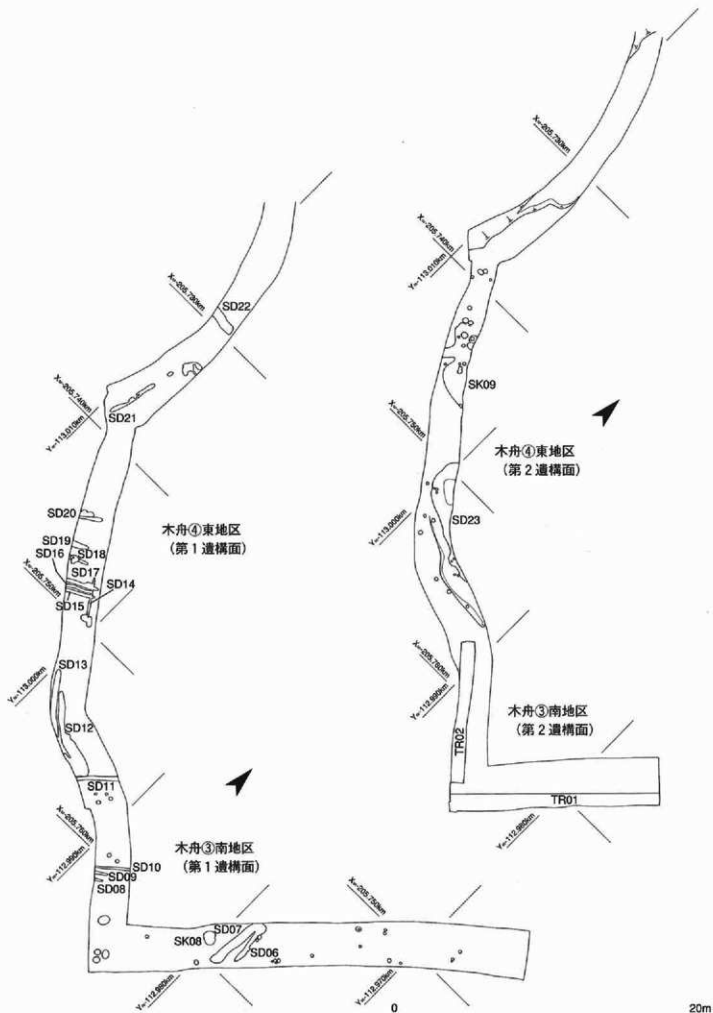


图4 遺構分布图(2)

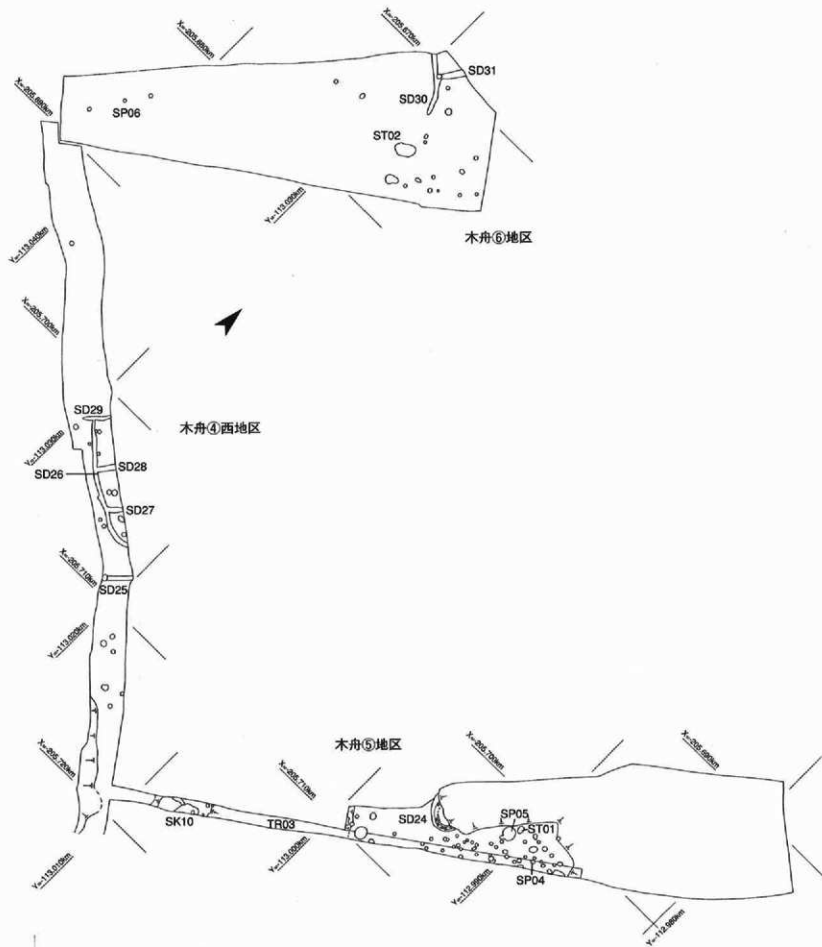
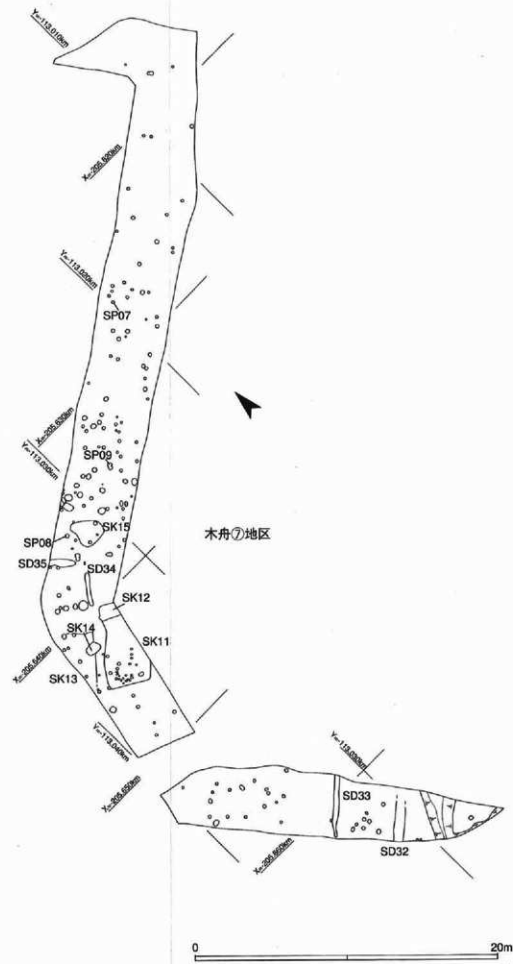


图5 遺構分布图(3)



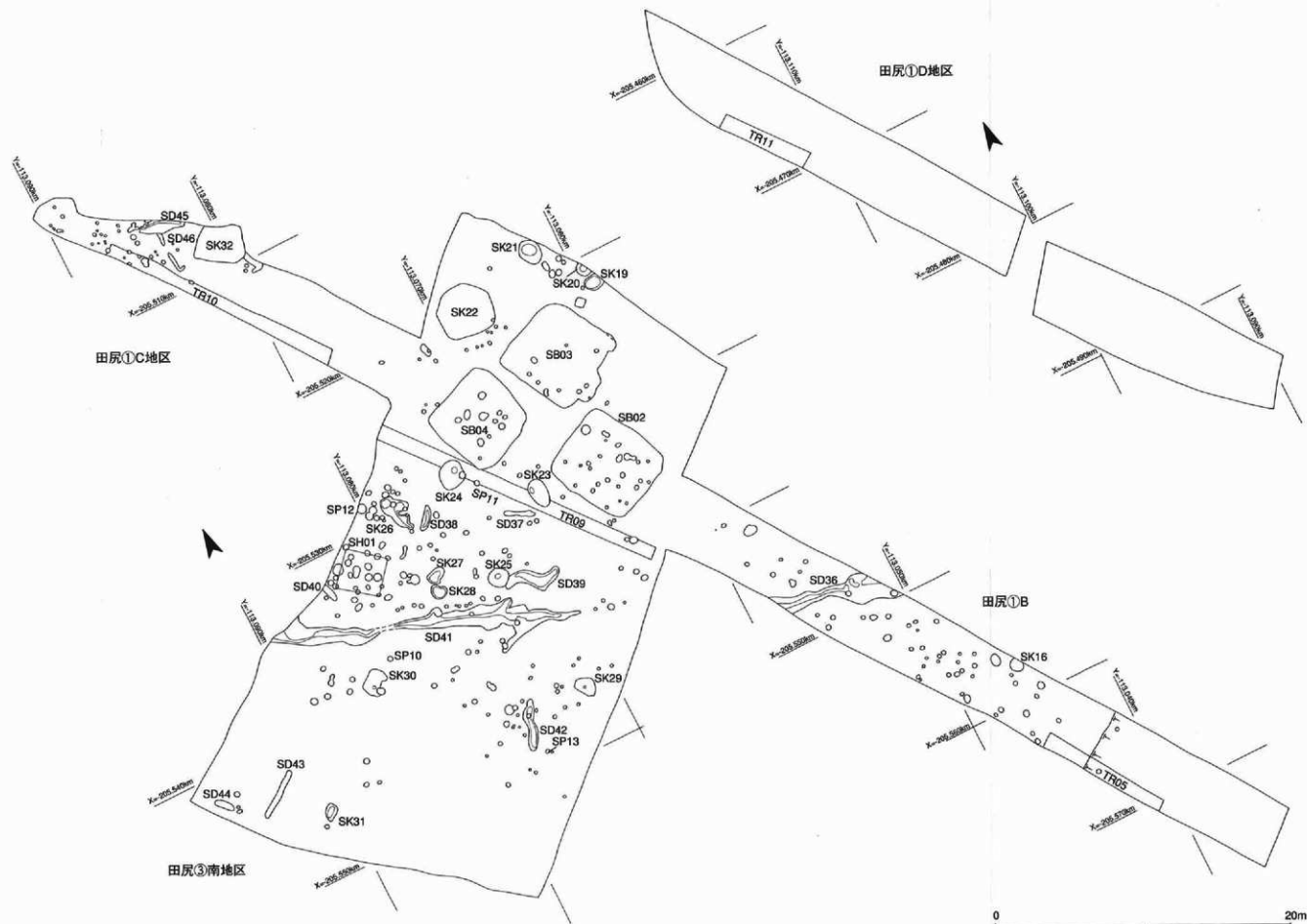


図6 遺構分布図(4)

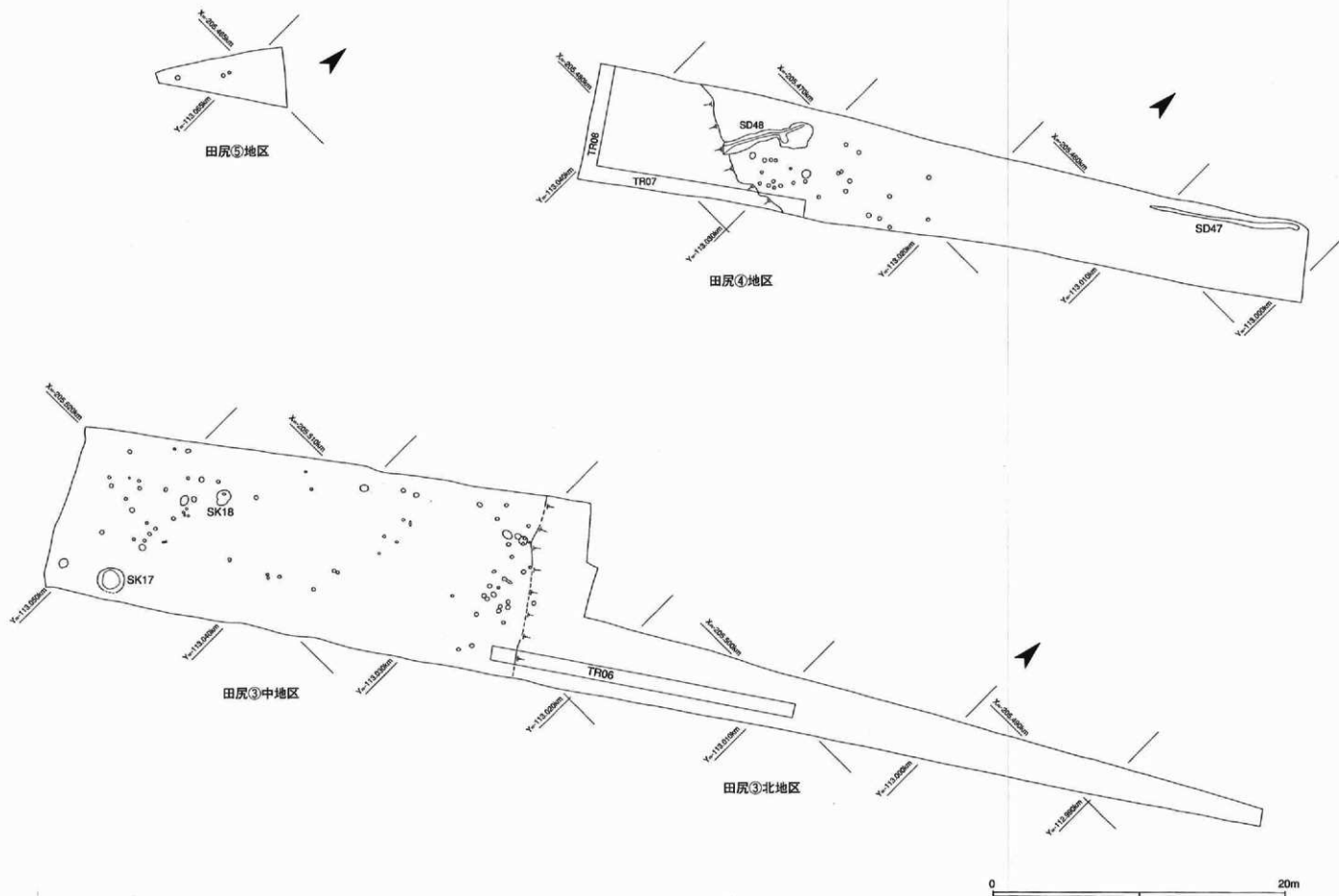


图7 遺構分布图(5)

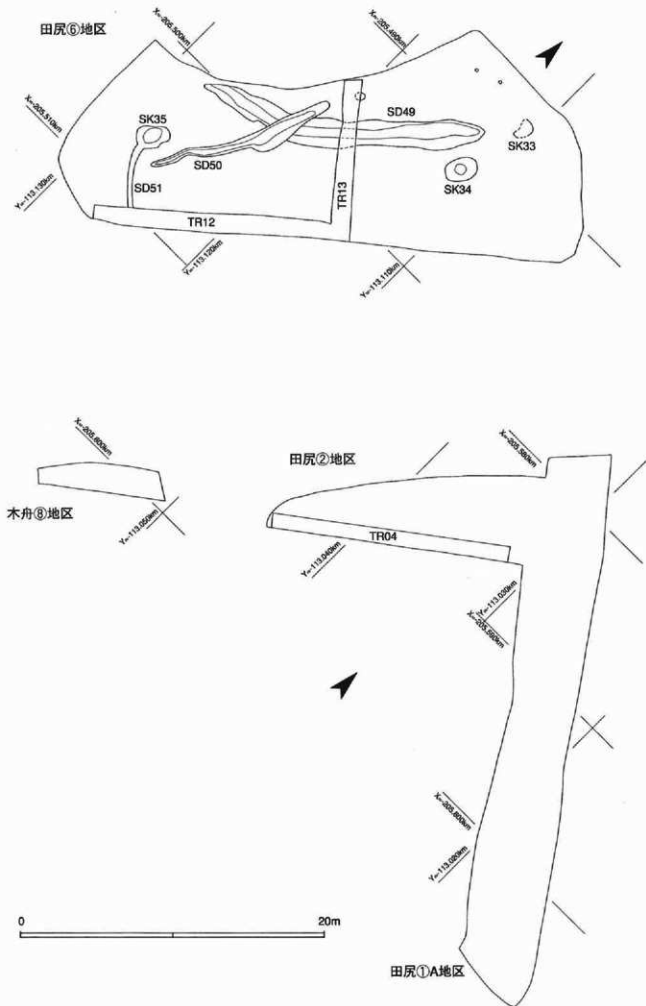


图8 遺構分布图(6)

Ⅲ 遺構について

1 概要

木舟地区、田尻地区はともに江良川によって形成された扇状地に位置しているため、耕土、盤土の下は、田尻⑦東地区で風化した花崗岩質の地山が現れるほかは、基本的には砂礫を含んだ粘質土層が重なっている。そして広範囲に分布する調査区を、幾筋もの自然流路の跡が錯綜しながら通り抜けている。こうした、住居などを構えるには好条件とはいえないところであるにもかかわらず、調査区内に竪穴住居4軒、掘立柱建物1棟、墓2基、土坑35基、溝51条、柱穴約900個を発見した。

木舟地区では、木舟②地区、木舟③中地区、木舟③南地区、木舟④東地区、木舟④西地区、木舟⑤地区、木舟⑥地区、木舟⑦地区に遺構が分布し、木舟④東地区には遺構面が2面あったが、木舟①地区、木舟③北地区、木舟⑤地区北東部、木舟⑦地区北東部には礫層が広がっていた。また、木舟④東地区から木舟④西地区にかけて、西側の江良川に向かって遺構面が落ち込み始めているところを調査区内で確認できた。

田尻地区では、田尻③南地区を中心に、田尻①B地区、田尻③中地区、田尻①C地区、田尻⑤地区、田尻⑥地区に集落が展開しているが、遺構面にも礫が多く含まれている。田尻③中地区北東部から田尻③北地区は、北東に向かって傾斜して砂礫層が広がる。田尻①D地区と田尻⑥地区北東部には砂礫層が広がり、これより北側には遺構がない。田尻④地区は中央部に遺構面があるが、田尻⑦西地区に向かって傾斜して砂礫層が広がり、南西部には池のような自然の落ち込みがある。これと同じような落ち込みは、田尻①B地区、田尻②地区にもあり、それぞれの黒色粘質土層から大量の土器が出土している。田尻①B地区と田尻②地区の落ち込みは、位置的に一体のものであろう。

今回の調査では、木舟、田尻両地区にわたって弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて集落が営まれていたことと、木舟地区に古代から中世にかけての遺構が広がっていることがわかったが、条里遺構といえるものはなかった。

2 竪穴住居（図版2）

4軒の竪穴住居の平面形はいずれも方形で、竈がみられず、中央の屋内土坑を炉として使用していたようである。S B01は礫の少ない粘質土層に掘り込まれているため、比較的安定した床面となっているが、田尻③地区のS B02、S B03、S B04はいずれも砂礫層に掘り込まれているため、床面も壁面も礫だらけである。また、この3軒は、ほぼ同じ方向を向いて建てられている。

S B01（図9）は、半分が調査区外である。平面形が円形に近いが、基本的には方形を意識しているものとみられる。調査区内で確認できる一辺の長さは530cm、床面の深さは17cmである。周溝はないが、中央の屋内土坑には礫や土器片が廃棄された状態で出土した。この中には、櫛歯波状文が施された、弥生土器の壺の複合口縁部（図21-1・図版10）が含まれていた。中央土坑付近から西側に薄く焼土が広がっており、中央土坑内にも焼土塊が混入していた。

S B02（図10）は、長軸が631cm、短軸が560cm、床面の深さは30cmである。周溝が、一部途切れながらも設けられている。住居内部にもL字状にカーブした溝が刻まれているが、これはS B02が築かれる以前の住居の周溝の一部とみられ、この住居の規模を拡大して建て直したものがS B02であるこ

とが考えられる。中央の屋内土坑付近には、薄く焼土がみられる。この土坑から離れた位置にも同じように焼土がみられるところがあるため、焼土が貼り床として利用されていた可能性もある。北側にある直径62cmの円形の土坑には、灰色の粘土が底に溜まっており、粘土を貯蔵していた屋内土坑とみられる。また南側の屋内土坑では、礫と土器が廃棄された状態で出土している。

S B03 (図11) は、長軸が656cm、短軸が580cm、床面の深さは25cmである。周溝はみられない。南辺の膨らんだ部分を重複した土坑とすると、長軸は586cmとなり、ほぼ正方形の住居となる。この膨らんだ部分が重複した土坑であるか否かは、後世の攪乱のため明らかにできなかった。田尻③南地区の他の2軒と比べて、埋土に礫が多く含まれているのが特徴的である。

S B04 (図12) は、長軸が554cm、短軸が545cmの正方形に近い平面形で、床面の深さは33cmである。西隅で途切れるものの周溝が設けられている。柱穴については、田尻③南地区の他の2軒の住居では主柱穴がはっきりしないのに対して、主柱穴が4本であったことが明確にわかる。

3 掘立柱建物

田尻③南地区に1間×2間のS H01を検出した。棟方向はN50°Wで、S D41の方向に規制されているとみられる。桁行長は292cm、梁行長は265cmである。6本の柱穴の深さは18~34cmで、弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器を含む遺物包含層に覆われていた。

4 溝

S D01はS B01と重複している。先後関係はS D01が後だが、埋土中や周辺の遺物包含層などの出土遺物から判断すると極端に時期が新しくなることはなく、集落に伴う遺構のひとつとみられる。

木舟④東地区の第2遺構面にS D23がある。調査区内に現れた範囲では溝のように見えるが、南端の深さが9cmであるのに対し、北側の深さが71cmと極端に深くなっており、土坑である可能性もある。弥生時代後期後半から古墳時代初頭の集落に伴う遺構とみられる。

木舟⑤地区の遺物包含層のすぐ下からS D24を検出した。弧を描いているが、北側半分を失っているため、円形に還るか否かはわからない。深さ13cmの溝の底に杭跡が並んでおり、排水用ではなく板壁などを建てるための溝であろう。瓦質土器の鍋の口縁部(図33-260)が出土している。

このほかの木舟地区の溝は、深さが2~20cmであるが、10cm以内のものが多く、全体に小規模である。また、埋土がおおむね灰色系で、木舟③中地区、木舟③南地区、木舟④東地区第1遺構面、木舟④西地区、木舟⑥地区の溝は砂質土、木舟⑦地区のS D34、S D35は粘質土である。S D12、S D22からは土師器片がかなり出土したが、これは第2遺構面の遺物包含層の影響とみられる。このほかの溝からはほとんど遺物が出土していないので、時期を明確にすることはできないが、それぞれ埋土の状況などから判断して、9世紀以降のほぼ同じ時期の遺構であろう。

田尻③南地区の住居群の南側を東西に流れるS D36、S D39、S D41は、途切れてはいるものの一連の溝とみられる。この溝の南側には、江良川の流れや田尻①B地区から田尻②地区にいたる落ち込みがあるため、田尻③南地区の集落の南を区画するものと考えられる。

S D48 (図13) は、田尻④地区の落ち込みに流れ込む溝である。集落跡と同じ時期の遺構で、多数の土器が廃棄された状態で出土した。祭祀に関連する遺構とみられる。

田尻⑥地区ではS D49とS D50が交差している。先後関係はS D49が先でS D50が後。S D49から

は土師器が多く出土しており、集落に伴う遺構である。西から東へ江良川に向かって流れており、これより北側には遺構がないため、集落の北西を区画しているものとみられる。S D50は、出土遺物が少なく、埋土が粗い砂である。南西から北東に流れる自然の流路である可能性もある。S D51からは弥生土器の底部(図23-52)などが出土しており、集落跡よりも時期が溯ることが考えられる。

このほか田尻地区では、S D43、S D44、S D47は集落跡よりも新しい時期の遺構であるが、これ以外の溝は集落に伴うものとみられる。

5 土坑

基本的に長軸または直径が1m以上のものを土坑とした。概略については表1にまとめた。

S K09(図14)は土師器を多量に含む遺物包含層の下から検出した。埋土中からも土師器が出土しており、集落に伴う遺構とみられる。周溝などはないものの、平面形や内部に焼土がみられることから考えると竪穴住居の可能性もあるが、半分以上が調査区外になるため確認できなかった。

S K11とS K13(図14・図版5)も竪穴住居状の平面形をした土坑である。床面までの深さが、S K11で9cm、S K13で7cmしか残っておらず、周溝など竪穴住居する決め手となるものが何もなく。S K11からは、今回の調査で唯一の瓦器片が出土しているが、S K13からは何も出土していない。なお、S K11はS K12と重複しているが、先後関係はS K11が先でS K12が後である。S K13とS K14も重複しているが、先後関係は確認できなかった。

S K17(図14・図版5)は、10~20cm大の礫が集められた下に、炭や炭化木片を含む黒褐色土(図17の土層断面図第2層)が方形に巡っている。中近世の木棺墓を思わせる出土状態だが、集石の下から底面までが5cm程度しかないため、墓ではないと判断した。

S K22(図15・図版5)の埋土は、3~30cm大の礫を多く含む黒褐色粘質土で、多くの土師器が含まれていた。中央に炉のような落ち込みがあり、あたかも竪穴住居のようであるが、平面形も規模も

遺構番号	地区	平面形	規模(m)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
S K01	木敷芝	不整形	163	112	9	土師器、銅器
S K02	木敷芝	長円形	-	100	15	土師器
S K03	木敷芝中	長円形	140	100	22	
S K04	木敷芝中	円形	118	98	8	
S K05	木敷芝中	円形	94	72	14	
S K06	木敷芝中	円形	76	70	12	土師器
S K07	木敷芝中	長円形	204	122	13	土師器
S K08	木敷芝	長円形	74	56	10	土師器、銅器
S K09	木敷芝	不整形	548	-	9	土師器、銅器
S K10	木敷芝	不整形	104	-	27	土師器
S K11	木敷芝	方形	-	304	5	土師器、銅器、青銅、白磁、瓦器
S K12	木敷芝	方形	-	94	12	土師器、銅器、白磁
S K13	木敷芝	方形	-	-	7	
S K14	木敷芝	長円形	98	68	11	
S K15	木敷芝	不整形	218	171	6	土師器
S K16	田尻上B	円形	95	90	19	
S K17	田尻上中	円形	180	-	19	弥生土器、土師器
S K18	田尻上中	不整形	111	92	27	土師器(54)
S K19	田尻上中	円形	-	106	16	
S K20	田尻上中	円形	100	-	5	土師器
S K21	田尻上中	長円形	177	142	43	土師器
S K22	田尻上中	不整形	265	372	58	土師器(63-69)
S K23	田尻上中	長円形	198	119	16	土師器(73)
S K24	田尻上中	長円形	200	173	22	土師器(74、75)
S K25	田尻上中	円形	146	136	31	土師器、灰質土器(256、261、262)
S K26	田尻上中	不整形	278	135	20	弥生土器、土師器
S K27	田尻上中	不整形	147	90	7	土師器
S K28	田尻上中	不整形	165	81	7	土師器
S K29	田尻上中	不整形	152	111	19	土師器
S K30	田尻上中	不整形	173	165	38	土師器(79-72)
S K31	田尻上中	長円形	121	79	14	
S K32	田尻上C	方形	-	-	18	土師器(55-62)
S K33	田尻上	不整形	134	-	19	
S K34	田尻上	長円形	250	156	29	
S K35	田尻上	不整形	220	140	17	

表1 土坑一覧表

付近にある3件の竪穴住居とは全く違うため、集落に伴う土坑と判断した。

S K 25は、田尻地区唯一の瓦質土器が出土した土坑である。20cm大の隙を多く含む砂質土の中に、足鍋が3点、茶釜が1点(図33-256・261・262・図版11)含まれていた。破損したものを廃棄したものとみられる。

S K 32(図16・図版5)は皿状の断面形をした土坑で、中央の石を中心に多くの土器が投げ込まれている。高環や器台のほか、底に穴がつけられた鉢(図23-59・図版11)などが出土しており、祭祀に関係する遺構である可能性がある。

6 墓(図13・図版6)

S T 01は土器棺墓である。墓坑の規模は、長軸が51cm、短軸が36cmで、深さは11cmだが、上の部分の大半が削り取られて失われている。胴部に穿孔のある甕の口縁にもうひとつの甕をかぶせたものであるが、2つの甕の口縁が向いている方向が同じである。このため一般的なカプセルのような状態ではなかったとみられる。弥生時代終末期から古墳時代初頭の集落に伴うものである。

S T 02は木棺墓である。墓坑の規模は、長軸が140cm、短軸が82cmで、深さが11cmである。底面には木棺の一部と見られる木片が、ほぼ等間隔に3本並んでいる。この木片の樹種同定調査を行ったところ、ヒノキ属であることがわかった。北東部に青磁の碗2点(図33-251・253・図版12)と土師器の碗1点が出土した。頭部の近くに供えたものであろう。

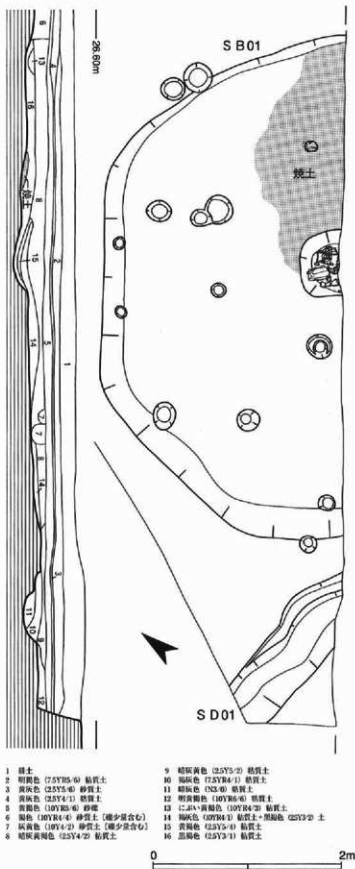


図9 S B 01・S D 01実測図

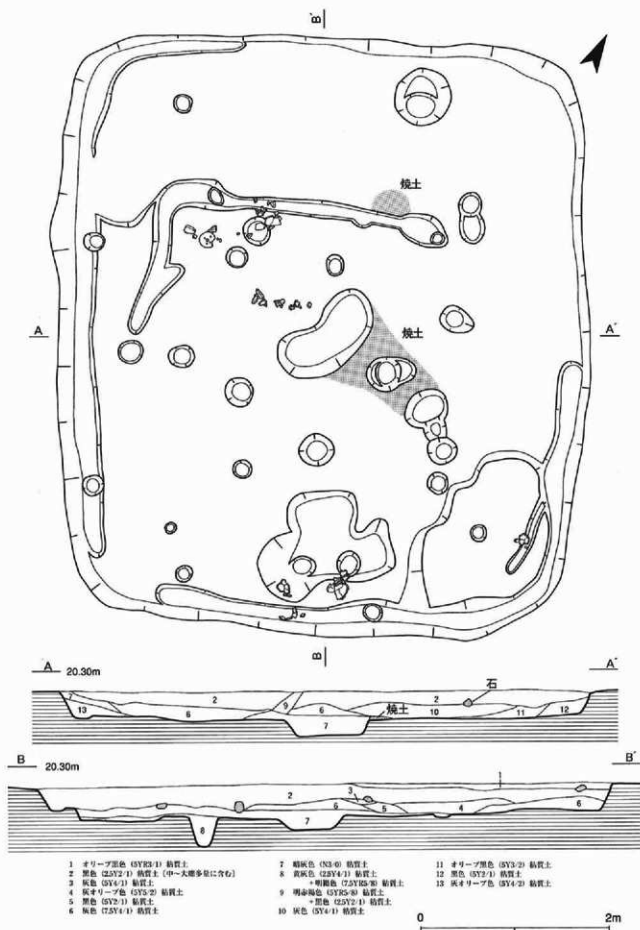


図10 SB02実測図

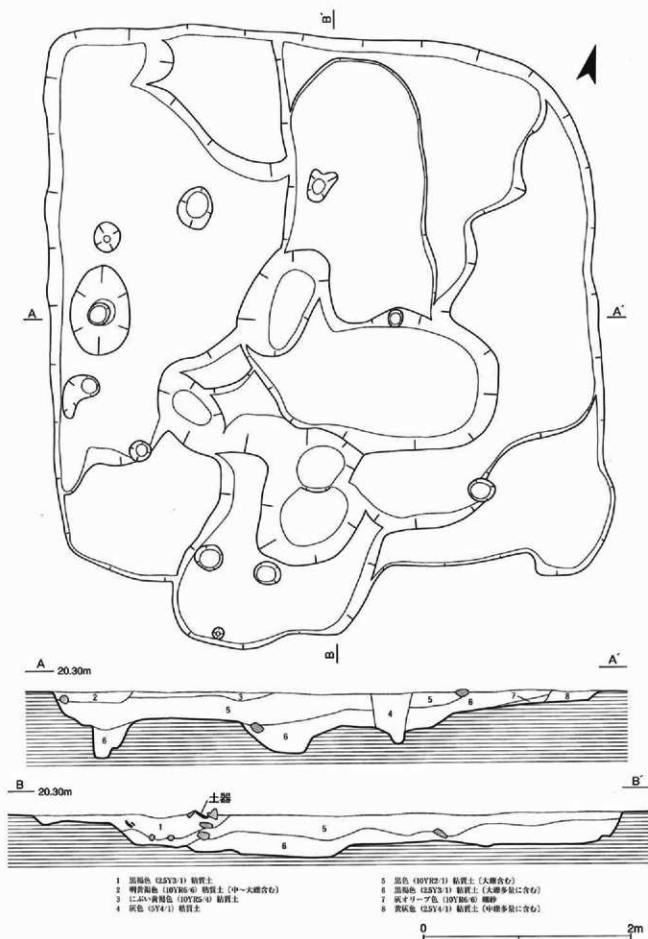
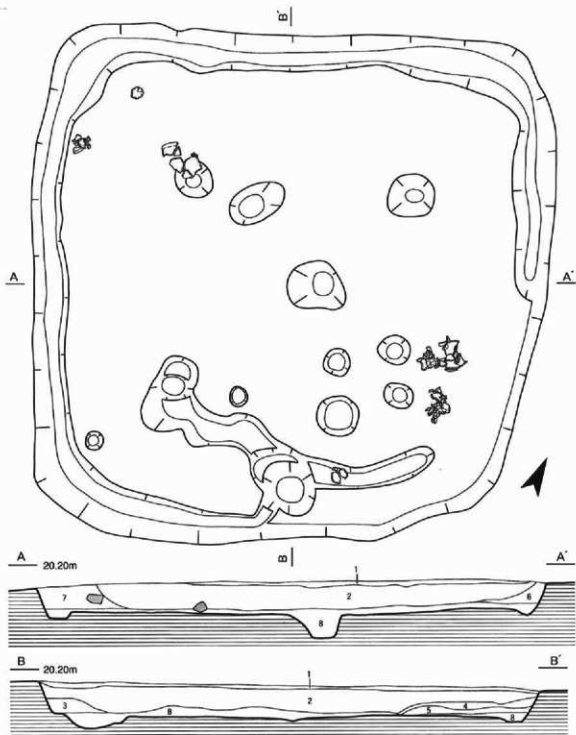


図11 S B03実測図



- 1 黒褐色 (25Y3/2) 粘質土
 2 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 (中～大礫含む)
 3 暗褐色 (10YR3/2) 粘質土
 4 褐色 (10YR4/4) 礫粘質土
 5 暗褐色 (10YR3/0) 砂粘質土

- 6 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土
 * 褐色 (7.5YR4/0) 粘質土 + オリーブ褐色 (2.5Y4/0) 粘質土
 7 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 + 褐色 (10YR4/0) 粘質土
 8 暗褐色 (10YR3/2) 粘質土

0 2m

図12 SB04実測図

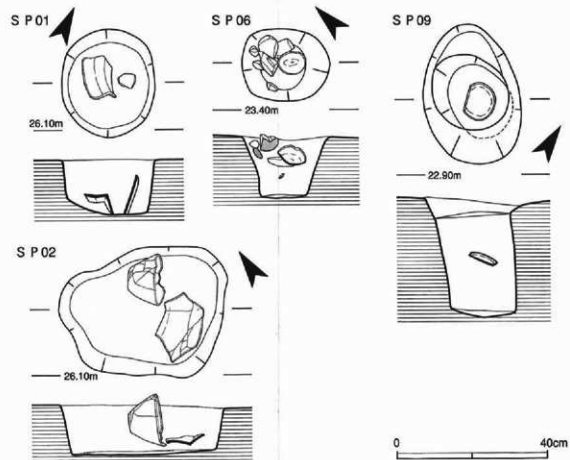
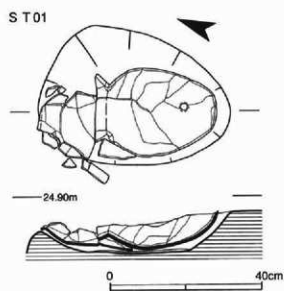
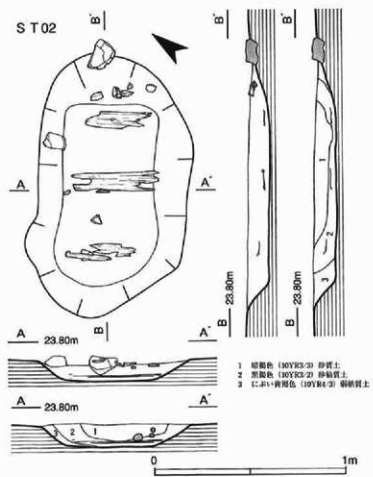
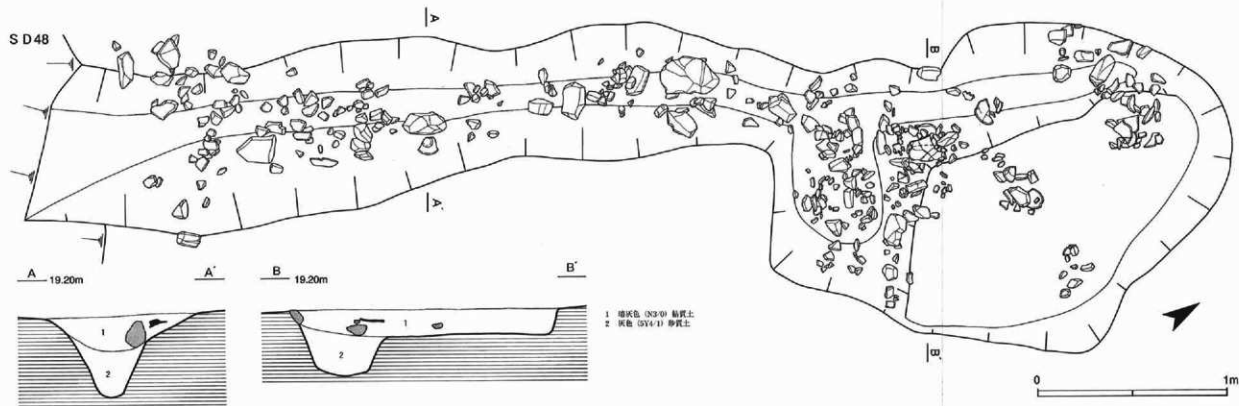


图13 遺物出土状況実測図

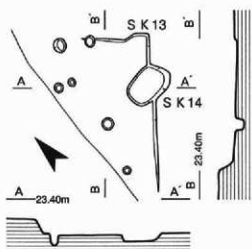
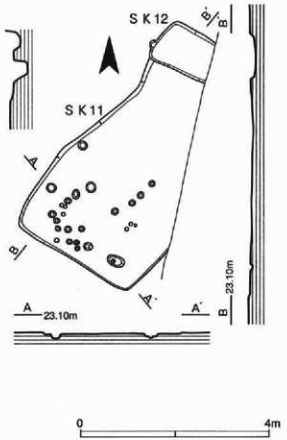
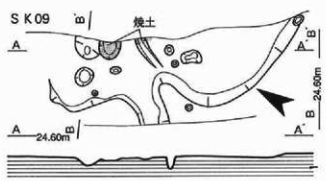
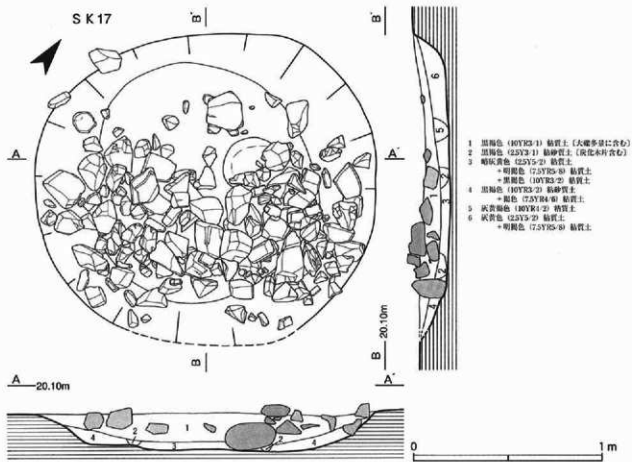


図14 土坑実測図

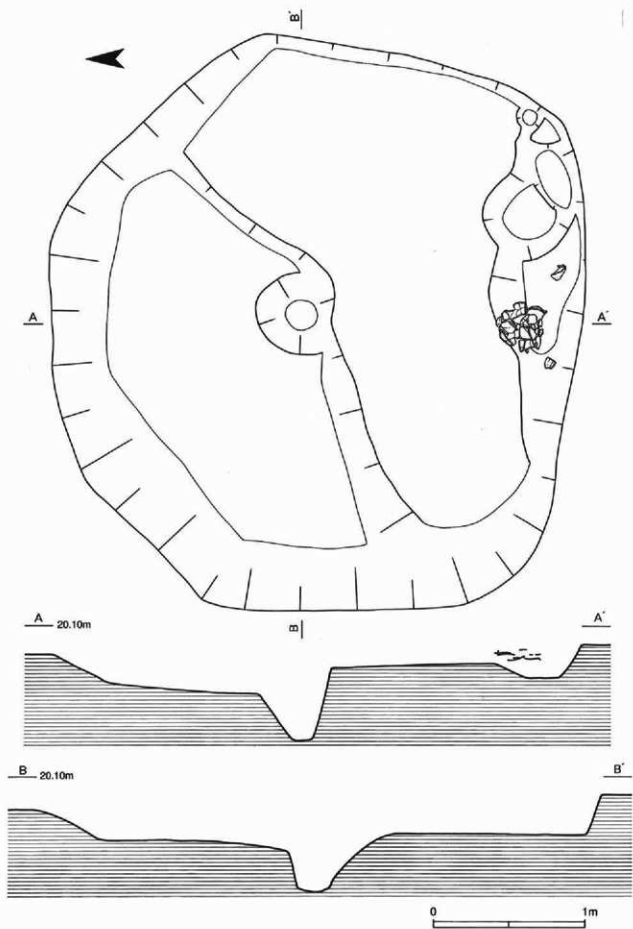


图15 S K 22实测图

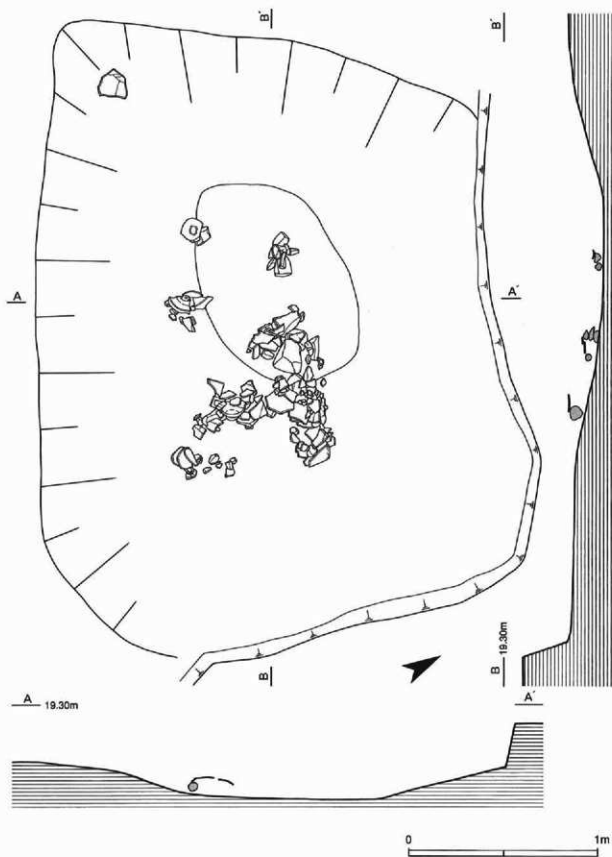


图16 S K 32实测图

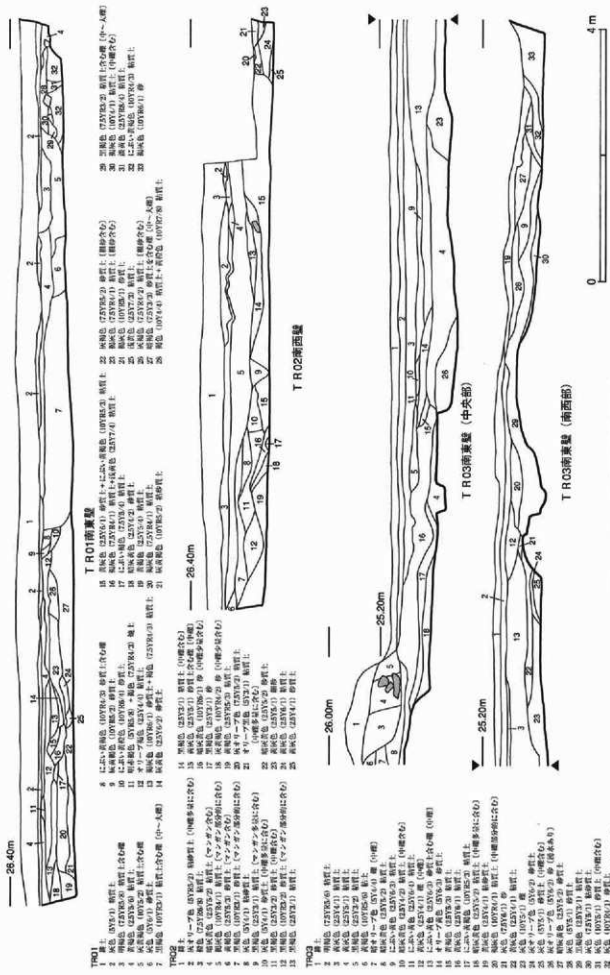


図17 トレンチ土層断面実測図 (1)

TR09

- 1 赤土層 (2575.0) 砂層
- 2 赤土層 (2575.0) 砂層
- 3 赤土層 (2575.0) 砂層
- 4 赤土層 (2575.0) 砂層
- 5 赤土層 (2575.0) 砂層
- 6 赤土層 (2575.0) 砂層
- 7 赤土層 (2575.0) 砂層
- 8 赤土層 (2575.0) 砂層
- 9 赤土層 (2575.0) 砂層
- 10 赤土層 (2575.0) 砂層
- 11 赤土層 (2575.0) 砂層
- 12 赤土層 (2575.0) 砂層
- 13 赤土層 (2575.0) 砂層
- 14 赤土層 (2575.0) 砂層
- 15 赤土層 (2575.0) 砂層
- 16 赤土層 (2575.0) 砂層
- 17 赤土層 (2575.0) 砂層

24.20m



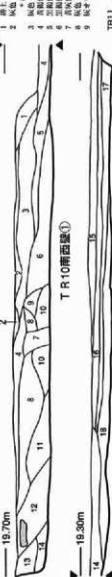
TR09南西壁①

24.20m



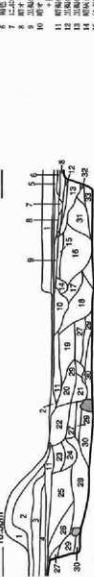
TR09南西壁②

19.70m



TR10南西壁②

19.30m



TR11南西壁

18.70m



TR14北壁壁

TR10

- 1 赤土層 (2575.0) 砂層
- 2 赤土層 (2575.0) 砂層
- 3 赤土層 (2575.0) 砂層
- 4 赤土層 (2575.0) 砂層
- 5 赤土層 (2575.0) 砂層
- 6 赤土層 (2575.0) 砂層
- 7 赤土層 (2575.0) 砂層
- 8 赤土層 (2575.0) 砂層
- 9 赤土層 (2575.0) 砂層
- 10 赤土層 (2575.0) 砂層
- 11 赤土層 (2575.0) 砂層
- 12 赤土層 (2575.0) 砂層
- 13 赤土層 (2575.0) 砂層
- 14 赤土層 (2575.0) 砂層
- 15 赤土層 (2575.0) 砂層
- 16 赤土層 (2575.0) 砂層
- 17 赤土層 (2575.0) 砂層

24.20m



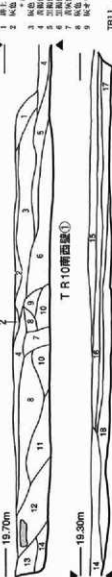
TR10南西壁②

24.20m



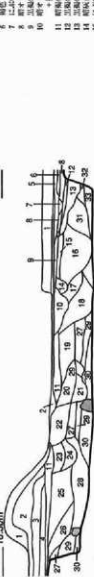
TR10南西壁③

19.70m



TR10南西壁⑤

19.30m



TR11南西壁

18.70m



TR14北壁壁

4m

0

図20 トレンチ土層断面実測図 (4)

Ⅳ 遺物について

遺物は、縄文時代から中世に及ぶ土器・磁器・石器・土製品などがある。その主体は、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の所産とみられる土器（弥生土器・土師器）で占められる。これらは、遺構（竪穴住居・溝・土坑など）及び遺物包含層から出土したものであるが、いずれも一括性の高い好資料といえる。以下、主要遺物の概略を記しておく。

1 弥生土器・土師器（図21～33、図版10～19）

S B 01（1～3） 1・2は、住居内の屋内土坑から出土。1は、口縁部外面に櫛指波状文を施す壺で、弥生時代後期中～後半のものと考えられる。

S B 02（4～16） 5は、住居内東側の屋内土坑から出土した甕の口縁部片。6は、体部の外面がハケ調整、内面がヘラケズリである。12は、小形の鉢。調整は、外面ハケ、内面ナデ。16は、高杯の脚部で、4か所に透孔がある。調整は、外面がハケ後にヘラミガキ、内面がハケ。

S B 03（17～25） 18は、甕。「く」字状の頸部から短く上方へのびる口縁部へといたる。口縁部の外面には、2条の擬凹線がめぐる。19は鉢で、内外面ともハケ調整。口縁部の内面に丹塗りの痕跡をとどめる。22は、鉢。底部の孔は、焼成前に穿たれたもの。25は、高杯の脚部。外面の調整は、柱状部が縦方向のミガキ、裾部がハケ。丹塗りがみとめられ、3か所に透孔がある。

S B 04（26～30） 26は、球形の体部をもつ壺で、口縁部は外上方に開く。肩部には、竹管状施文具による刺突文がある。28は、小形丸底鉢。口縁部の内面がヘラミガキで、他の部位は、ハケ後にヘラミガキ。30は、鉢。内面と外面上半に煤が付着する。頸部に指オサエの痕跡がみられる。

S D 48（32～40） 32・33は、いわゆる山陰系土器の壺の口縁部である。頸部より屈曲して立上がる口縁部の上部に、やや外方に開く立上がり部を貼付けている。36は、甕。口縁部は、緩やかに外反し、口唇部は、丸みをもたせておさめる。調整は、外面がハケ、内面がヘラケズリ。

S D 49（41～51） 41は、壺の口縁部。立上がり部は、やや短かく直立。内面の頸部より下位は、ヘラケズリ。42は、甕。口縁部は、弧を描いて外反する。調整は、外面がハケ、内面がヘラケズリ。46・47は、器台。47は、受部の底部中央に孔、脚部の4か所に透孔がある。

S K 32（55～62） 56は、壺。口縁部外面に稜をもち、立上がり端部は、やや外方に開く。

S K 22（63～69） 65は、鉢。調整は、底部外面のナデを除いて丁寧なハケ。

S P 02（77～78） 78は、複合口縁の壺。82は、高杯の杯部。内外面ともヘラミガキ調整。

S P 13（81） 弥生時代後期後半とみられる器台で、口縁部の内外面に櫛指波状文を施す。

遺物包含層（83～238） 83～110は、木舟④地区出土。101は、壺。頸部から外方にやや開く口縁部にいたる。体部の調整は、外面がハケ、内面がヘラケズリ。169～174は、田尻②地区で出土。171は、在地系の長脚高杯。4か所に透孔があり、裾部内面にヘラ記号がみられる。弥生時代終末に比定される。174は、大形の壺で田尻②地区から出土。体部と口縁部の一部を欠くがほぼ完形。底部は、やや厚めでレンズ状を呈するが安定性を欠く。体部の最大径部分の外周に断面台形の突帯が貼り付く。複合口縁で口唇部は、外反さみに短くおさめている。調整は、内外面とも丁寧なハケ。口縁部と立上がり部との接合部外面及び突帯には、キザミが施される。弥生時代終末～古墳時代初頭のものと考え

られ、山口県内では、土井ヶ浜Ⅳ式土器に近似する。176～238は、田尻④地区で出土。190は、甕。体部の内面がハケ、外面がタケキ。分割成形技法により底部と体部をつないだ痕跡がみとめられる。200は、田尻④地区より出土。外反する頸部から口縁部に続き、やや内傾する立上がり部へと続く。口縁部には、7条の擬凹線がめぐる。器壁の薄さやほかの土器と明らかに異なる胎土などを鑑みると、搬入品の可能性がある。酒津式土器の特徴に似る。207は、高杯。杯部は中位から外反して上方に直線的にのびる。口縁部内面に櫛描波状文を施す。219は、器台。体部は、外上方に直線に開き、口唇部は、短くつまみ上げる。脚部には、上下2段の透孔が4か所にある。注目すべきは、脚部の破損線に沿って2孔ずつ2か所に穿たれた細孔の存在で、おそらく通紐して両片を結わえるための補修孔であった蓋然性が高い。237は、手楯形土器。耳の一部を欠失するがほぼ完形。底部は、平底。体部は、皿状底部の端部をわずかに残して接合しているため突帯のようにみえる部分がある。体部は、直立する。口縁部は、キザミを施す。調整は、底部の外面が指オサエ後にナデ、内面がハケとナデ。体部は、内外面ともヨコナデ。覆部は、口縁端部をのこして接合。調整は、外面が丁寧なハケ、内面がハケ後にナデ。面は、上下にやや肥厚する広面T型1類。周縁に突帯を薄く貼りつけ、キザミを施す。キザミは、鉢部との接合部の周縁にもめぐらされている。胎土は、在地のものともみられる。覆部の外面下半から体部にかけて煤が付着し、覆部内面は、焼熱を受けた痕跡が明瞭である。形態は、X3類の範疇に含まれ、3a期（古墳時代初頭）のものともみて大過なころう。

2 石器・土製品ほか（図33-239～246、図版19）

239～241は、石斧。石材は、いずれも玄武岩。239は、田尻①地区の遺物包含層出土の打製石斧。240は、折損品で田尻④地区の遺物包含層出土。241は、田尻③南地区のSP10から出土。242は、円鏝（玄武岩）の両端を打ち欠いた石錘で、田尻③中地区北側の遺物包含層出土。243は、腰岳産黒曜石を使用した凹基無茎式の石鏃。逆刺部の右側端を欠くがほぼ完形で、調整も丁寧。244は、把手付土器の把手部片とみられ、田尻①C地区の遺物包含層から出土。245は、SB02で出土した土玉。246は、有孔土製品。田尻①C地区から出土した。（西岡）

3 須恵器（図33-247～249、図版13）

247～249は、木舟③南地区及び木舟④東地区の遺物包含層から出土した杯身。247は、胎土が精良で焼成も堅緻。248と249は、粗砂粒を多く含むやや軟質。8世紀後半～9世紀前半に比定される。

4 磁器・瓦質土器・土師器（図33-250～262、図版11～12）

ST02（251・253） いずれも青磁碗で、12～13世紀の所産。251には、片彫り及び櫛描きによる花文がある。施釉は、灰オリーブ色。

SD24（260） 瓦質土器の鍋。体部下半を欠失するため、脚の有無など不明。

SK25（256・261・262） 256は、瓦質土器の茶釜。体部の最大径部分に耳が付き、その取付け部分に直交して体部内面まで貫通する穿孔がみられる。体部の下位には、鈎がめぐる。261・262は、瓦質土器の足鍋。口縁部は、短く内側に屈曲。調整は、内外面ともにハケ。底部の外面に格子状の叩き痕がある。外面には、煤が付着。16世紀前半のものともみてよい。257～259は、土師器の皿。木舟⑥地区と木舟⑦地区の柱穴で257がSP06、258がSP08、259がSP09からそれぞれ出土した。いずれも底部に糸切り痕をのこす。（向上）

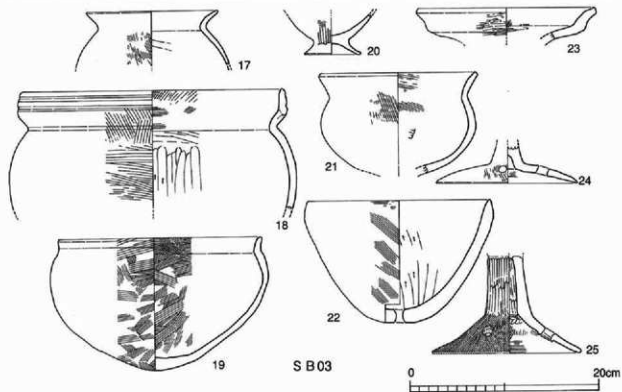
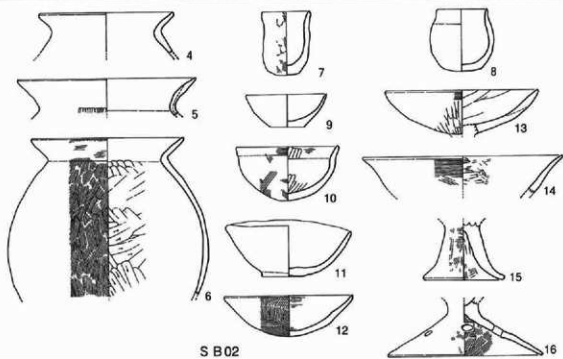
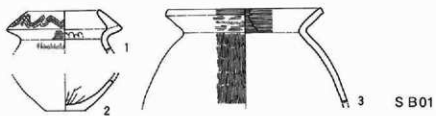
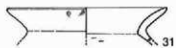
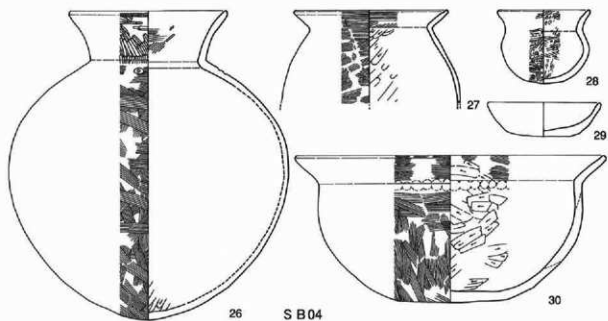
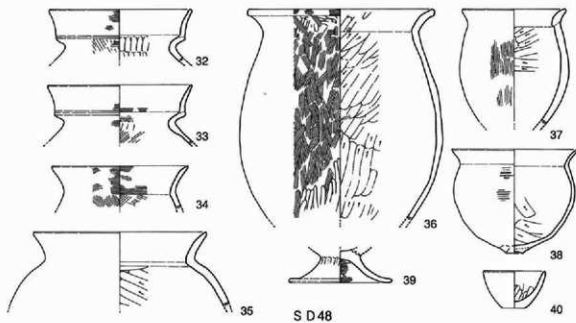


図21 出土遺物実測図(1)

※網かけは丹塗り



S D 12



S D 49



图22 出土遺物実測図(2)

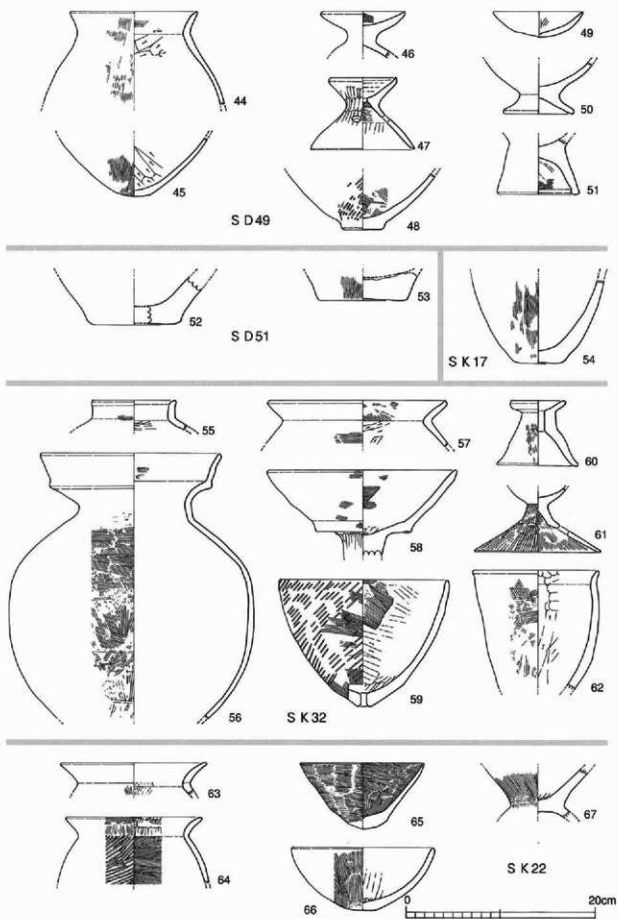


图23 出土物实测图(3)

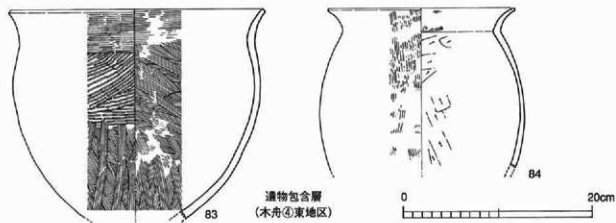
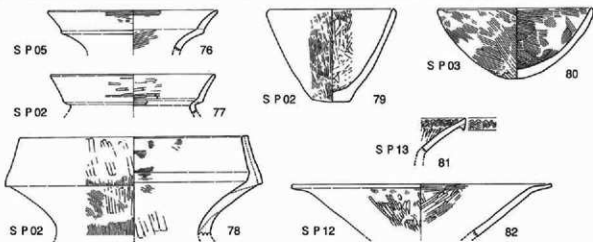
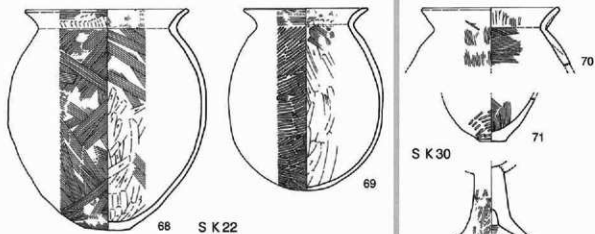


图24 出土遺物実測图(4)

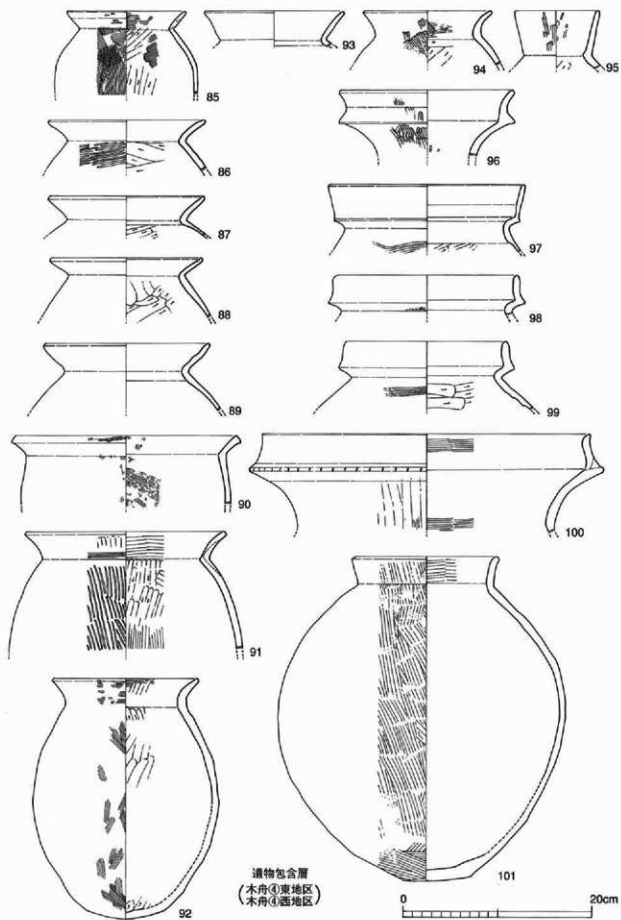


图25 出土遺物実測図(5)

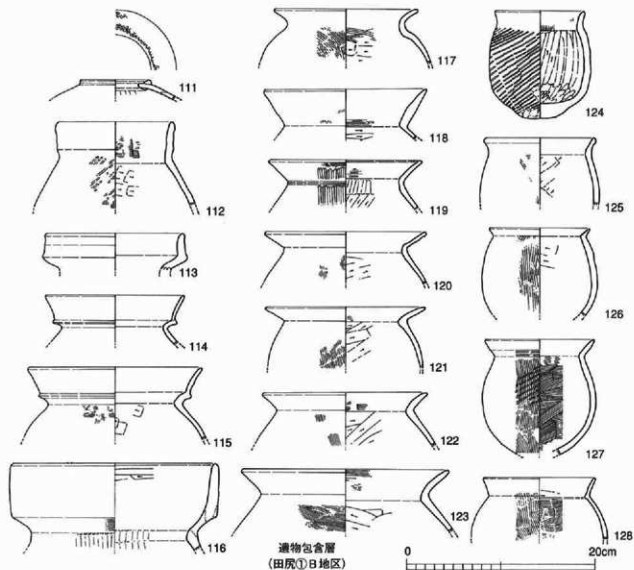
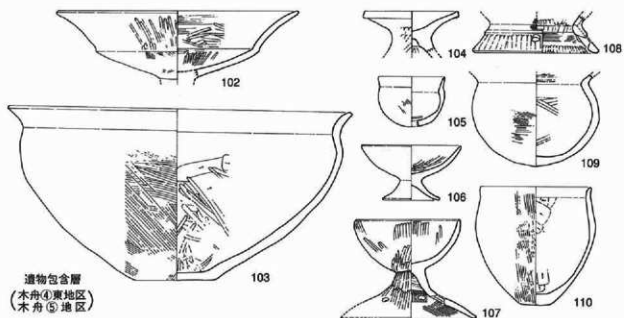


图26 出土遺物実測圖(6)

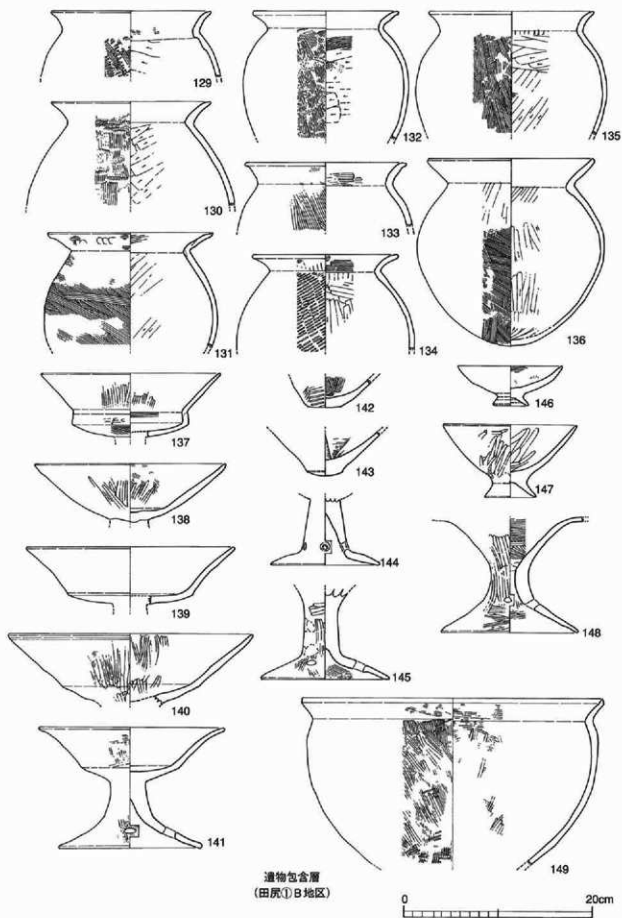


图27 出土遺物实测图(7)

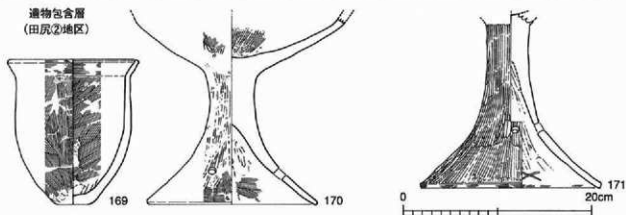
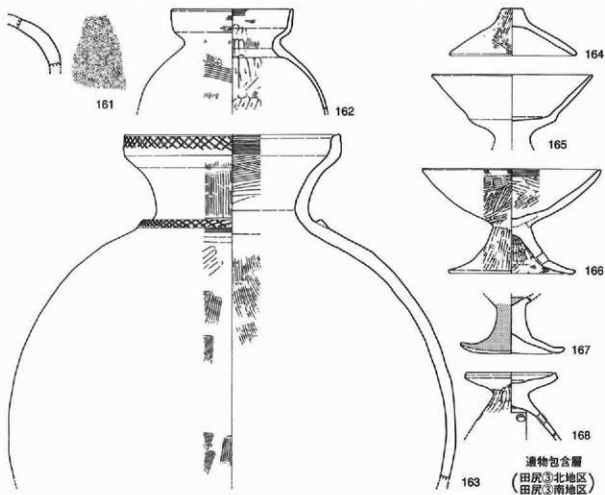
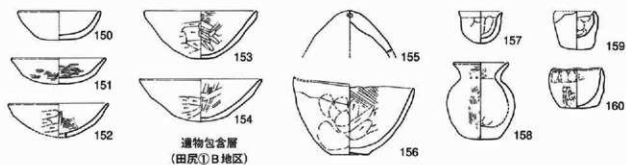


図28 出土遺物実測図(8)

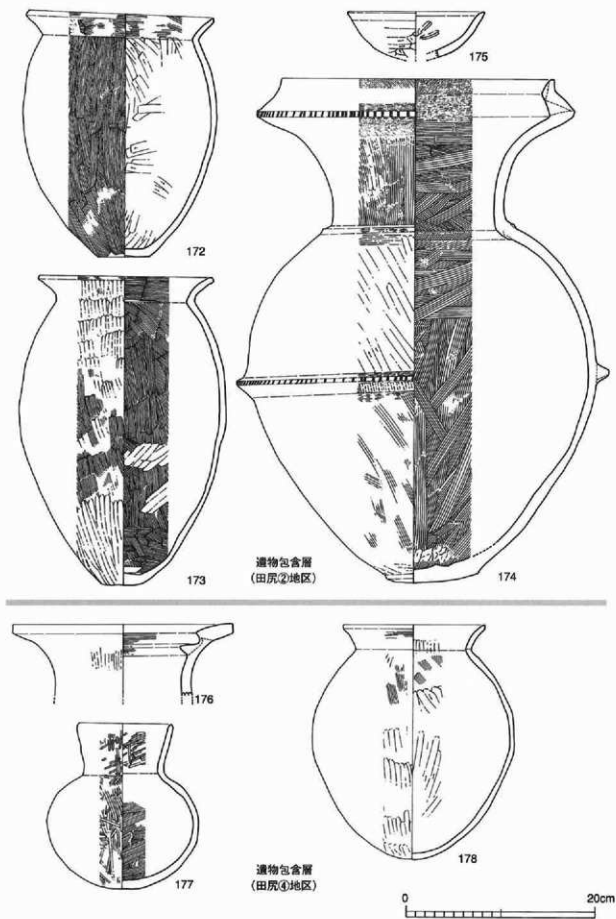


图29 出土遺物实测图(9)

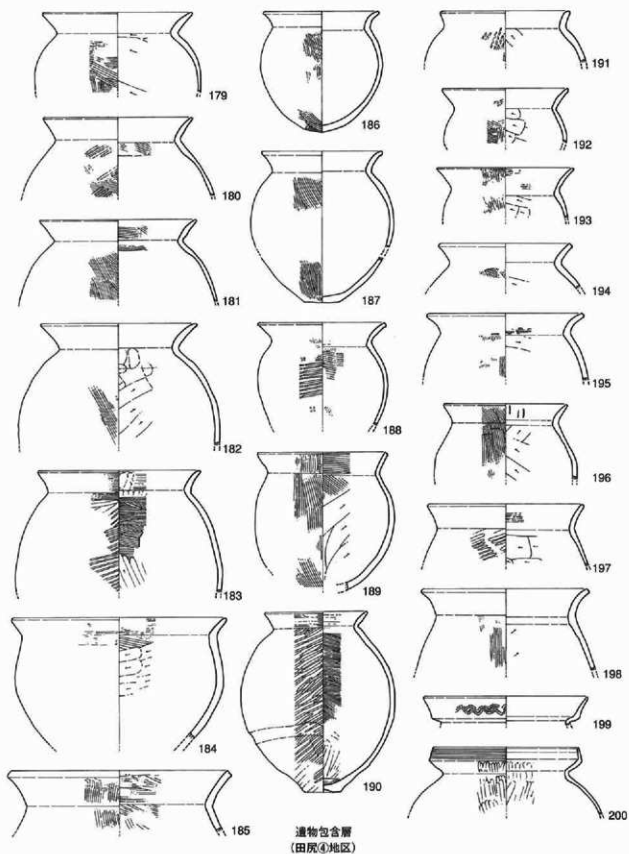


图30 出土遺物実測図 (10)

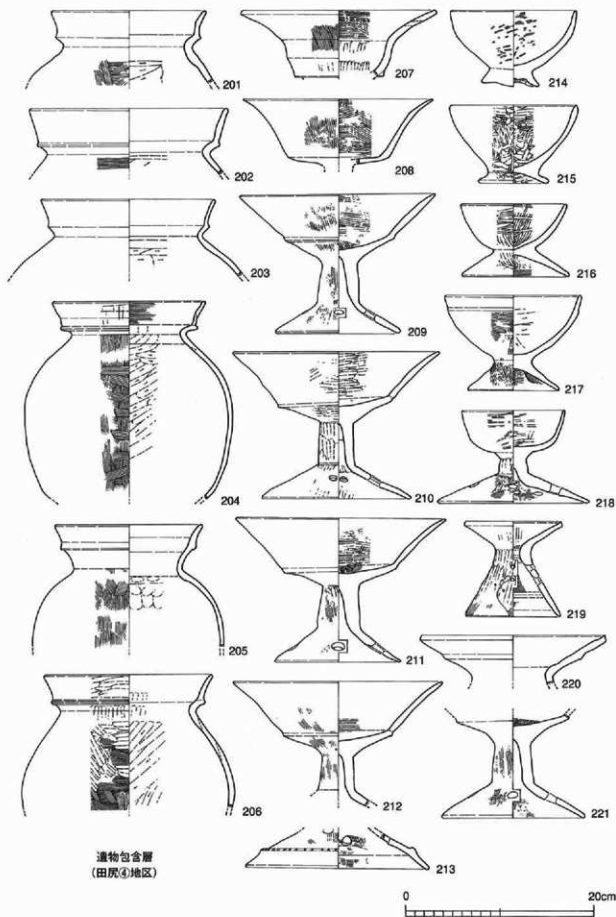


図31 出土遺物実測図 (11)

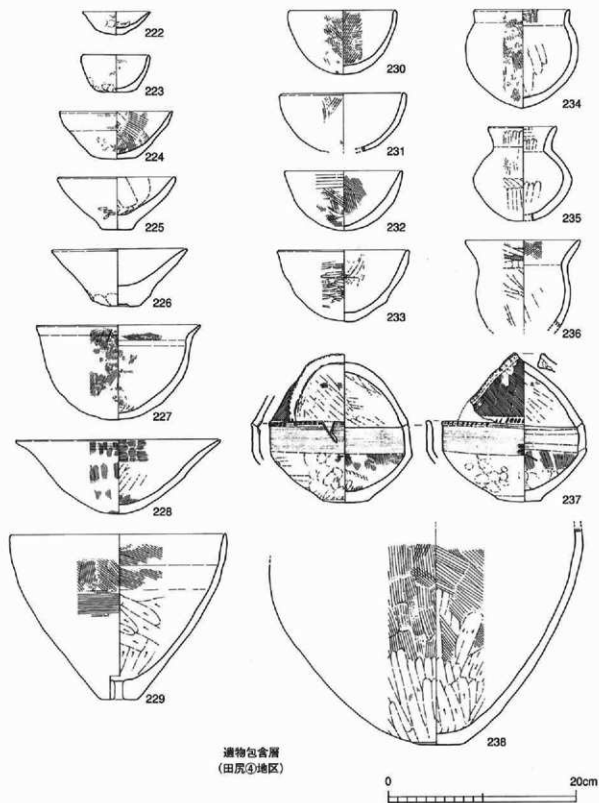


图32 出土遺物実測図 (12)

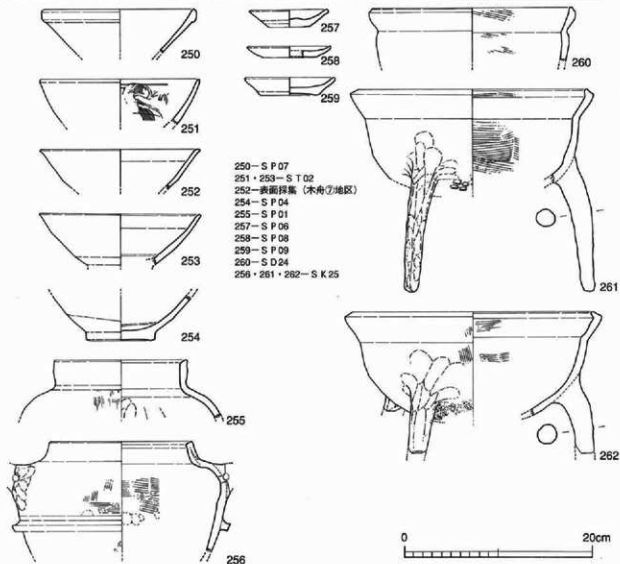
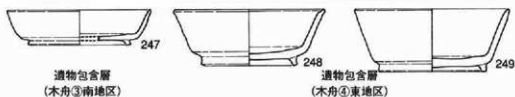
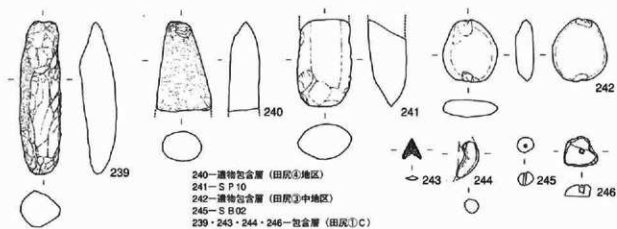


図33 出土遺物実測図 (13)

V ま と め

1 はじめに

今回の調査対象地区周辺は江良というが、昨年度同様、調査の便宜上小字名を踏まえて、木舟地区、田尻地区と呼称し、さらに図2のようにそれぞれの地区を細分した。

遺構については、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の集落が木舟、田尻両地区に広がっていたことと、古代から中世にかけての遺構が木舟地区に分布していることがわかった。古代から中世にかけての遺物は、木舟③南地区から木舟④東地区にかけて及び木舟⑤地区、木舟⑥地区、木舟⑦地区に集中し、田尻地区からは、SK25から瓦質土器が出土したほかは、皆無に近い状況であった。

2 植生の復元

TR02第5層(図17)、TR04第19層、TR05第32層(以上図18)、TR07第26層(図19)及び木舟④東地区SK09付近の遺物包含層から試料を採取して花粉分析を行った。さらに、TR05第32層から出土した樹根(図版7)と、ST02の木棺の一部とみられる木片の樹種の同定を行った¹⁾。

TR04第19層、TR05第32層、TR07第26層は、それぞれ池のような落ち込みの底面近くの土器を大量に含んでいた層である。また、木舟④東地区包含層は、SK19やSD23を覆っていた層で、これも土器を多く含んでいた。ともに弥生時代終末期から古墳時代初頭に比定できる。

TR04第19層では、樹木花粉の占める割合が草本花粉よりも高く、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、クリが目立つ。他にブドウ属、マツ属複雑管束亜属、スギなどがみられる。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科がやや多く、続いてカヤツリグサ科、ヨモギ属、ガマ属-ミクリ属などがみられる。一方、TR05第32層では、樹木花粉、草本花粉ともTR04第19層と同じような傾向がみられる。しかし、樹木花粉でブドウ属がみられない点と、ヤマモモ属が多く検出され、カバノキ属のみみられるという点が異なる。また、この層から出土した樹根はコナラ属アカガシ亜属に同定され、花粉分析の結果と矛盾しない。このような分析結果から、当時のTR04、TR05周辺では、常緑広葉樹のカシ類、シイ属、落葉広葉樹のクリを主な構成要素とする照葉樹林が広がっていたことが考えられる。また、TR05付近には常緑広葉樹のヤマモモ属が生育し、TR04付近にはブドウ属が生育しており、林縁が近かったことを示している。また、水生植物を多く含むイネ科やカヤツリグサ科、ガマ-ミクリ属や日当たりのよい改変地を好むヨモギ属が多いことから、日当たり良好で湿潤な環境が推定できる。イネ属型が検出されたことから、近くに水田が分布していたと考えられる。

TR07第26層では、樹木花粉の占める割合が草本花粉よりもやや高い程度である。樹木花粉ではシイ属が最も目立ち、続いてマツ属複雑管束亜属、クリ、コナラ属アカガシ亜属などがみられる。これは、TR04、TR05周辺の森林と、構成要素が若干異なるものの基本的には同様の森林が広がっていたことを示している。草本花粉ではイネ科がやや多くみられたほか、日当たりのよい乾燥地を好む人里植物や耕地雑草であるヨモギ属、カヤツリグサ科、タンポポ科、キク亜科や、栽培植物であるアブラナ科、イネ属型なども検出されていることから、この付近の開けた場所には水田のほか畑が分布していた可能性がある。

以上のような田尻地区の弥生時代終末期から古墳時代初頭の植生と、昨年度調査した出合地区、藤

本地区^④における花粉分析結果から推定された縄文時代晩期の植生を比較してみると、森林の構成要素には大きな相違がないことがわかる。このことから、川棚系跡周辺では縄文時代から古墳時代初頭にかけて、基本的には同じ構成要素の照葉樹林が続いていたことが考えられる。また、二次林要素でもあるシイ属、クリ、マツ属が比較的多いことは、二次林化していた可能性を示唆している。

木舟④東地区の遺物包含層では、花粉密度が非常に低く、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属がわずかにみられるだけである。これは、有機質遺体が分解される、例えば乾田のように乾湿を繰り返す堆積環境であったことを示しているが、この遺物包含層が多量に土器(図24・25・図版13)を含んでいたことと、これに覆われていたほぼ同時代といえる遺構、特に竪穴住居の可能性もあるSK09(図14)の存在を考えると、当時のこの地区が水田だったことは考えにくい。江良川に向けて落ち込んで行く地形の間隙であることを考えると、水流の影響も考えられるのではないだろうか。

TR02では、第5層の表面に置かれた須恵器の坏身2点(図33-248・249・図版13)が第3層に埋もれた状態で出土した。また、第5層に含まれる須恵器などから、この層を8世紀末～9世紀前半に比定した。第5層の花粉分析の結果、花粉密度が非常に低く、樹木花粉のクリ、草本花粉のイネ科、アブラナ科がわずかに検出されただけであるため、この時期の木舟④東地区も乾湿を繰り返す乾田のような環境にあったことが考えられる。TR02の土層断面を観察すると、第2遺構面はなく、自然流路の上に第5層が堆積しており、水田として利用されていた可能性は十分に考えられる。

なお、ST02の木片はヒノキ属に同定された。周辺に生育していた可能性もあるが、一般的に建材、家具、生活用具などに利用される樹種であるため、他地域から持ち込まれたことも考えらる。

3 集落跡

竪穴住居は、木舟②地区にSB01、田尻③南地区にSB02、SB03、SB04が分布している。

木舟①地区と、木舟③北地区には遺構面がなく、耕土、盤土の下には砂礫層が続いている。両地区に挟まれた木舟②地区は、東側の現在の江良集落から続く細い尾根筋の先端部に当たるとみられる。SB01は、中央の屋内土坑に土器片が廃棄された状態で出土している。これによって、弥生時代後期中頃から後半にかけての時期が示される。他の地区から出土した土器は、弥生時代終末期から古墳時代初頭のもものが圧倒的であり、また弥生時代後期後半以前に溯る可能性のある遺構SD51だけである。このため、今回の調査で検出した集落は、弥生時代後期後半と弥生時代終末期から古墳時代初頭の少なくとも2つの時期に分けられ、弥生後期後半の集落が木舟②地区の東側に広がり、木舟②地区はその西端に位置していることが推定できる。

弥生時代終末期から古墳時代初頭の集落の中心は、竪穴住居が3軒検出された田尻③南地区であろう。この遺構面は江良川に向かって落ち込み、田尻③中の北東部で落ち込む。北側は田尻①C地区、田尻⑥地区で落ち込み、集落の北側を区画するとみられるSD49が横たわっている。田尻④地区にもSD48が刻まれたこの時代の遺構面がある。また、南を区画するとみられるSD36、SD39、SD41のさらに南側、田尻①B地区で落ち込んでしまう。しかし、さらに南の木舟④東地区、木舟⑤地区で同じ時期の遺物包含層や、SD23、SK09、SK10、ST01が分布しているため、この時期の集落は2カ所に分かれて営まれていた可能性がある。木舟地区の遺構面は木舟④東地区では、TR02で南に落ち込み、西は江良川に向かって落ち込む。また北も木舟⑤地区の手前で落ち込み、木舟⑤地区では

北に向かって落ち込んでいる。木舟③南地区にはこの遺構面がみられない。したがって、この区域の集落は、木舟④東地区から木舟⑤地区にかけての狭い範囲に限られることになる。

田尻③南地区で検出した3軒の竪穴住居は、どれも平面形が方形で同じような規模である。どれも埋土に礫を多く含んでいたが、中でもS B03は特に多く含んでいた。また、S B02とS B04では、床面に置かれていたとみられる状態で出土した土器が複数あったのに対し、S B03にはそれがなく、どれも流れ込んだか廃棄されたような出土状態で、時的にも他の2軒から出土した土器よりもやや古いものとみられる。このようにS B03は、他の2軒とは異なる特徴を持ち、3軒の位置関係を考え合わせると、S B02とS B04は庄内期に同時に存在した可能性があるが、S B02は他の2軒よりも早い時期に建てられ、同時に存在しなかったものと推定できる。

豊浦低地における弥生時代終末期から古墳時代初頭の集落跡は、近年調査例が増えてきた。昨年度調査された川棚条里跡大浦・台地区の旧河川からは、この時期の土器が廃棄された状態で大量に出土した。甕、鉢、椀、高坏、器台が完形に近い良好な状態で出土している¹⁰。また、川棚条里跡を南から見下ろす広い台地上の高野遺跡¹¹にも集落が広がっており、同じ台地に位置する林崎遺跡¹²、宝蔵寺遺跡¹³にも竪穴住居などが見つかっている。この高野遺跡を上回る遺構、遺物が検出され、その密度も高いため、この時期の拠点集落であったと考えられている遺跡が吉永遺跡¹⁴である。吉永遺跡と高野遺跡では、屋外周溝を伴う竪穴住居を発見した。これは、同じ警濶沿岸にも例がみられる¹⁵が、内陸部の菊川町下七見遺跡¹⁶では多数検出された。屋外周溝のある住居とない住居が同時期に存在する理由として階層分化の反映とも考えられるが、それを裏付ける資料は乏しい。田尻③南地区の竪穴住居には、林崎遺跡、宝蔵寺遺跡と同様、屋外周溝を伴うものがないが、このような屋外周溝を伴う竪穴住居のない集落が拠点集落の周辺に存在するとすれば、この地域における集落単位の階層分化を反映している可能性もある。今後の調査の進展に伴い、詳細に検討する必要がある。

木舟地区、田尻地区では集落跡の前後の時期、即ち弥生時代中期から後期前半と4世紀後半¹⁷以降の古墳時代の遺物は全く出土しなかった。したがって、この地区に集落が営まれていた時期は限られおり、その他の時期には土地利用がなされなかったか、耕地となっていたものと考えられる。前回調査した出合地区では5世紀前半に集落が形成され、一時廃絶して再び6世紀後半の集落が営まれていることがわかっている。ここでも、これ以外の時期を示す遺物がほとんどみられず、集落が存在した時期が限られたものであることを示している。こうしたことから江良川流域では、時代によって集落が移動していたことがわかる。出合地区では完形に近い弥生時代前期後半の甕が1点出土し、藤本地区の包含層でも同じ時期の土器が出土しているため、付近にこの時期の集落が存在していた可能性があるが、弥生時代中期の遺物はこれまでの2次にわたる調査では出土していない。周辺の中期の遺跡としては、城山遺跡¹⁸、向日山遺跡¹⁹、宝蔵寺遺跡がある。いずれも高位に位置する遺跡で、低位には中期の遺跡は分布していない。高野遺跡や吉永遺跡でも中期の遺構は検出されていない。

下関市の綾羅木川下流域では、弥生時代中期は前半から海面が上昇して浅い谷が埋められ、今日の沖積平野の概形ができたとしており、吉母浜遺跡では現海面より約2m上昇したことが確認されている²⁰。このような環境の大きな変化は豊浦低地にも同時に起きていたとみるのが自然で、中期にはこの影響で集落が高い位置に移動したものとみられる。江良川流域の集落は低い位置にあるため海岸

線の変動の影響を受けやすく、時代によって位置を移動する必要があったものと考えられる。来年度以降の調査で、こうした集落の変遷についてさらに解明が進むものと期待される。

4 水と火のまつり

池などの水霊に対する信仰は古くから全国的にみられ、例えば出雲の八重垣神社鏡ヶ池では今も良縁を求める男女が参拝し、池中に鏡を載せた白紙を浮かべて占う風習があるが、池底からは6～7世紀の須恵器が大量に発見されており、この時代から池霊信仰が続いていることを示している⁽¹⁰⁾。古墳時代初頭の水霊信仰の例としては奈良県桜井市の橿向遺跡で検出されている祭祀遺構としての大型土坑群があげられる。この土坑群には、湧水層まで掘り抜かれ、多くの土器とともに出土した木製品や自然木には焼く焦げているものが多いという共通点があり、「水と火のまつり」が行われていたと考えられている。まつりのあと廃棄されたとみられる出土遺物から、稲穂を脱穀し、炊飯し、盛りつけ、儀礼のち共食するという過程が推測されている⁽¹¹⁾。

今回の調査で発見した田尻③南地区を中心とする集落の北に位置する田尻④地区と南に位置する田尻①B地区から田尻②地区に、土器が大量に出土した自然の落ち込みがある。調査区に限られているため、これらを池とは断定できないが、かなりの湧水があるため泉だった可能性もある。田尻④地区では庄内期中心、田尻①B地区から田尻②地区では弥生時代終末期から庄内期の土器が出土している。どちらも甕、鉢、高坏、ミニチュア土器が目立つが、このうち田尻④地区からは手焙形土器が出土した。手焙形土器は県内では初出だが、弥生時代後期後半に河内地方で発祥し、畿内を中心に古墳時代初頭まで存在したとされ、橿向遺跡でも数多く出土している。内部で火を燃やして祭祀で使用したものとみられ、銅鐸などの地的宗儀から銅鏡の天的宗儀への過渡期的祭祀を担ったものとする説もある⁽¹²⁾。今回出土した手焙形土器も覆部内面に熱を受けた明瞭な痕跡があり、内部で火を燃やしたのは明らかである。また、田尻②地区のTR04第19層から先の焦げた木切れが出土している。これらのことは、橿向遺跡と同様に「水と火のまつり」が行われていたことを示しているのではないだろうか。

5 おわりに

田尻⑥地区から近い、江良川の対岸には、大塚古墳の推定地がある。今回の調査範囲からは条里遺構が全く検出されなかったが、表層条里からみても、大塚古墳の辺りが条里遺構の限界なのかもしれない。来年度以降の調査の進展によって、それが明らかになることを期待する。

注

- (1) 花粉分析と樹種同定については、応用地質株式会社に委託した。
- (2) 『川棚条里跡(叢地地区・相合地区・藤木地区)』財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 2000
- (3) 『川棚条里跡(大浦・台地区)』豊浦町教育委員会 2000
- (4) 『高野遺跡(北地区)』財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 1999
- (5) 『高野遺跡(南地区)』豊浦町教育委員会 1999
- (6) 『林崎遺跡』豊浦町教育委員会 1987
- (7) 富士整秀『宝蔵寺遺跡の発掘調査』『豊浦町史三〔考古編〕』豊浦町 1993
- (8) 『吉永遺跡(郡一東地区)』山口県埋蔵文化財センター 1999
- (9) 『石原遺跡』『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』山口県教育委員会 1973
- (10) 『新下間塚岡遺跡発掘調査概報』下関教育委員会 1976
- (11) 『下七見遺跡Ⅰ』菊川町教育委員会 1989 『下七見遺跡Ⅱ』菊川町教育委員会 1992
- (12) 寺沢薫『畿内古式土師器の編年と二・三の問題』『矢部遺跡』奈良県教育委員会
- (13) 『城山遺跡』豊浦町教育委員会 1986
- (14) 『日向山遺跡』豊浦町教育委員会 1987
- (15) 水島勉夫『発掘調査の成果』『綾羅木川下流域の地域開発史』下関教育委員会 1990
- (16) 大塚啓雄『鏡ヶ池』『神道考古学講座第5巻祭祀遺跡特説』雄山閣 1972
- (17) 石野博信『三輪山麓の祭祀の承継—大型土坑と建物跡—』『橿向』桜井市教育委員会 1976
- (18) 高橋一夫『手焙形土器の研究』六一書房 1998

報告書抄録

ふりがな	かわたなじょうりあと（きふねちく・たじりちく）
書名	川棚条里跡（木舟地区・田尻地区）
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第26集
編集著者名	西岡 義貴 鈴木 卓 向上 昭彦
編集機関	財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号
発行年月日	西暦2001年3月23日（平成13年3月23日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ′ ″	東 緯 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわたなじょうりあと 川棚条里跡 （木舟地区・ 田尻地区）	きふねちくたじりちく 豊浦郡豊浦町 おおたけのかわたな 大字川棚	35443		34°8′25″	130°56′28″	20000427 ～ 20001019	5,065	ほ場整備

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
川棚条里跡 （木舟地区・ 田尻地区）	集落跡	弥生時代 古墳時代 中 世	竪穴住居	4軒	弥生土器	
			掘立柱建物	1棟	土師器	
			墓	2基	須恵器	
			土坑	35基	青磁	
			溝	51条	白磁	
					瓦器、瓦質土器	
					土製品	
					石器	

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第26集

川 棚 条 里 跡

(木舟地区・田尻地区)

2001年3月

財団法人 山口県教育財団

編集・発行 山口県埋蔵文化財センター
(山口市春日町3番22号)

印 刷 瞬報社写真印刷株式会社
(下関市長府扇町9番50号)